

エスペラント

LA REVUO ORIENTA

6 月 號

2600

1940

Junio

Jaro XXI N-ro 6



財団法人 日本エスペラント學會發行圖書

學習書・教科書・辭典

		定價送料 圓 銭	
エスペラント捷徑	多少外國語の素養ある人のため最良の獨習書	0.50	6
エスペラント講座	外國語を全然知らぬ人にABCから教へる講座		
エスペラント案内	エスペラントとは何かから始め文法全般まで	0.30	3
新撰エス和辭典	語數豊富, 譯語正確, 携帶至便 上	0.80	6 並 0.60 6
新撰和エス辭典	見出語數6萬, 出典明示, 附錄豊富, 印刷鮮明	2.50	6
點字エスペラント文法と小辭典		1.00	6
エスペラント初等讀本		0.30	3
エスペラント中等讀本		0.30	3
エスペラント童話讀本		0.20	3
エスペラントの鍵		0.05	3
エスペラント講習用書		0.30	3
エスペラント短歌講習用書		0.20	3
イソップ物語 深切明快・脚註付		0.25	3
ザメンホフ讀本ザ著作拔萃 I 翻譯篇, II 原作篇, III. ザメンホフ論		各 0.20	3
	合卷	0.50	6
エスペラント醫學文範	醫學論文の好模範, 醫學生の講習會用に最好適	0.40	3
エスペラント文例集	重要單語 720 造語例文例 0.80 6 函入カード版	1.50	14
新撰エスペラント手紙の書方	例文豊富, 書翰百科辭典の觀, 370 頁	1.20	10
エスペラント日記の書方	365日, 1日1例文, 社會萬般の記録, 譯註付	1.20	9
エスペラント發音研究	エスペラント發音上の疑問の點は何でもわかる	0.30	3
リングヴァイ・レスポンドイ	ザメンホフの質疑應答集, 學習者必備の書	0.50	6

エスペラント文庫

ザメンホフの生涯	0.40 6	國際通信の常識	0.50 3	エスペラントの會話	0.40 3
----------	--------	---------	--------	-----------	--------

エスペラント文藝讀本

スラヴ篇 ツルゲネフ, チェホフ	0.25 3	フランス篇 ドオデ, ユウゴオ等	0.25 3
沙翁悲劇篇 ハムレット他 3	0.30 3	北歐篇 付「アンデルセンとZ」	0.30 3

對 譯 詳 註 書

マテオ・ファルコネ メリメ作	0.30 3	代理通譯 ベルナール作	0.30 3
ハイネ詩集 珠玉の詩 40 篇	0.30 3	魔法使 ザイデル爐邊物語から	0.30 3
レイモント短篇集 2 篇	0.30 3	エスペラント童話集	0.70 3
愛あるところ神あり	トルストイ作。附「エス語研究書解題」。282頁		1.50 9

エスペラント書き文獻

日本書紀	I 神代紀・神武天皇紀 II 綏靖天皇紀——應神天皇紀 III 仁德天皇紀—— 宣化天皇紀 IV 欽明天皇紀——皇極天皇紀 I, II, III 各 1.20 9 IV 1.80 10
------	---

惜しみなく愛は奪ふ 有島武郎著	0.75 6	ヴェルダ・カルト 石原榮三郎作	1.00 6
中村博士遺稿集 原作, 翻譯	0.70 6	海神丸 野上彌生子作	0.40 3
東洋の俠血兒 長谷川伸作	0.45 6	倫敦塔 夏目漱石作	0.15 3
霧の中 山本有三作ラジオ劇	0.15 3	日本民族の起源	0.10 3
佛說阿彌陀經	0.15 3	日本小史 野村佐一郎著	0.20 3
大學中庸 特	0.75 6 並 0.60 9	孝 經	0.30 3

歐羅巴親類廻り 上	0.95 10 並 0.85 10	國語 擁護を論じて國際語に及ぶ	0.20 3
-----------	-------------------	-----------------	--------

内外發行エスペラント圖書のくはしい目錄は往復はがきでお申込み次第お送りします

新撰エス和辞典

岡本好次編

ポケット型約 300 ページ

並(クロス装) 60 銭・送料 6 銭

上(革装) 80 銭・送料 6 銭

エス和辞典のうち、最もすぐれたものとして絶對的な信頼を受け、エスペラントの字引といへば、すぐ「新撰」といふくらみである。型はポケットにしのばすに適する小さいものであるが、単語の数は最も多く、すでに 50 版を重ねてはゐるが、新しい語彙は、つねに追加して、最も新しいものにいたるまで収めてあり、譯語は最も正確、學習者が片時も傍を離してならないものである。

新撰和エス辞典

岡本好次編

コンサイス型 67 行 2 段組 824 ページ

革表紙

2 圓 50 銭・送料 6 銭

見出語約 7 萬、各種専門語、最新語にいたるまで収めてある。譯語はきはめて正確妥當、世界中のおもなエスペラント辞典を全部参照してあるから、これ 1 冊で、それら全部に匹敵する。堂々 120 ページの附録には、人名、地名、滿支人姓の讀み方、星聖名などの譯、和文エス譯法、そのほか、エスペランティストに日常必要な事項を満載。印刷は鮮明無比、装釘は瀟灑、製本はきはめて丈夫である。

エスペラント 単語カード

城戸崎益敏著

1 圓 50 銭・送料 14 銭

エスペラント文例集

四六倍判 150 ページ・80 銭・送料 6 銭

動詞、形容詞、助辭のうち日常最も多く用ゐられる重要な単語 720 語を選び、それぞれに多くの造語例、使用文例を添へてあるから、單に単語語記用としてのみでなく、和文エス譯、自由作文などの参考用としても最も有益なものである。別に、同一内容の書架用の大形本「エスペラント文例集」がある。

緑 星 章

甲(和服用)、乙(背廣用)

40 銭・送料 4 銭

丙(和服用)、丁(背廣用)

80 銭・送料 4 銭

小型(和服用と背廣用あり)

40 銭・送料 4 銭

會員章(學會會員に限る)

70 銭・送料 4 銭

エスペラントチストの紋章は平和と希望との象徴「緑の星」である。エスペラントを學ぶ者は、すべてこれを胸に輝かして、お互の合印としてゐる。本會制定の緑星章は、いづれも美しい七寶製である。

甲、乙、小型は合金壹、丙、丁、會員章は純銀臺で、甲、乙、丙、丁は白地緑星を圍むコバルト色の環に Internacia lingvo. Esperanto の文字入、小型は白地に緑星、會員章は、緑星に Esperanto-JEI の文字入。

圖書目錄は 3 銭切手封入お申込みください

エスペラント LA REVUO ORIENTA

• Junio 1940 •

LA ENHAVO

Frontartikolo

- 三宅史平・第28回大會をかえりみる 1
Mijake-Ŝ.: Kia estis la 28-a kongreso

Literaturo kaj scienco

- K. Hamada: Tagiĝo de Orienta Civilizo 12
川崎直一譯・東亜文化の黎明(濱田耕作)
B. Szczesniak: Adam Mickiewicz 9
シチェスニヤック・アダム ミツキエヴィチ
Y. Nagayo: Tao-Juanming 18
三宅史平譯・陶淵明(長與善郎)
S. Natume: Songoj en dek noktoj 16
エスクラピーダ・クルーボ譯・夢十夜(夏目漱石)
K. Tabata: Ĉerko de S-ro Perdis 7
田畑喜作・ペルディス氏の柩

Lernigo

- 小坂狷二・諺集解義 28
K. Ossaka: Komentoj al "Proverbaro Esperanta"

Movado

- Literaturo kreskas (新刊紹介) 36
Infanoj en Torento - Esperanta familioludo - ラテン語ノ手ホドキ
三宅史平・日本國民はなぜエスペラントをまなばなければならないか
高等學力檢定試験問題 35
Problemoj de la ekzameno

Diversaĵoj

- Por la amikeco inter Japanujo kaj Brazilo 4
日本ブラジル親善のために
L. Fontes: Brazilo-Japanujo 4
フォンテス・日本とブラジル
倉地治夫・アメリカで逢つた人々 32
H. Kurachi: Samideanoj en Usono
最初のタイプライター書き原稿 31
宮崎大會奇聞 34
滿洲國特輯【Manĉoukŭo Seĉcio】
M. Yamagata: El marĝuraj legendoj 39
山縣光枝・滿洲の傳説

Kroniko

- LA REVUO ORIENTA 41
ブラジルからメセーヂー宮崎で放送ー懸賞論文反響ーFranca Espe-
rantisto 續刊ーブラジル宣傳局長ー各地報道ー新聞雜誌とエスー讀者
欄ー本郷だより

Kovrilo: Partprenantoj de la XXVIII-a Kongreso.

LA REVUO ORIENTA

Junio, 2600 (1940)

Jaro XXI N-ro 6

Represo el tiu ĉi organo estas libera, kondiĉe, ke oni indiku la fonton kaj sendu al la redakcio tri ekzemplerojn de la koncernaj numeroj.

大 會 を か え り み る

皇紀 2600 年をいわず意味で、4 月 29-30 日、宮崎市でひらかれた第 28 回日本エスペラント大會は、その出席者およそ 100 人、「かず」についていえば、さかんであつたとはいえないが、その質についていえば、成功であつた。くわしい報告は、來月號に Oficiala Protokolo が出る豫定であるから、はぶいて、ここには、この大會についての感想を、斷片的にならべてみたい。

*

感謝されること。この大會の準備委員會の活動ぶりと深切さとは、もうしぶんのないものであつた。これは、感謝されるとともに、こののちの模範とされなければならないところである。

活動ぶりの例：—1. 知事、および市長の臨席を得たこと。皇紀 2600 年の宮崎市とゆう特別の事情があつたとはいへ、知事や市長がしたしく席にのぞんで、みずから祝辭をよんだことについては準備委員會のほねおりがおうきかつたにちがいない。

2. 縣や市から多額の補助をえたこと。

3. おうくの國國のエスペラント團體からの祝辭をあつめえたこと。これほど、おうくの祝辭を海外からあつめえたことは、近來に、めづらしいことである。

深切さの例：—1. わたくしは、大會のはじまるまえ、大阪の川崎氏や進藤氏と、30 日の観光地のひとつである西都原をおとずれたが、これに際して、準備委員會では、地元妻村の役場の吏員太佐氏に交渉、案内させた。この、ひとりびとりの参加者に對するこころづかいには感謝のほかない。

2. 合宿所のほかに、會員個人の住宅を、宿舍に提供された。利用したひとはすくなかつたが準備委員會のひとびとは、まことにいそがしいなかにもかかわらず、あたたかい心でもてなしてくださつた。

*

感謝されること、もうひとつ。

それは、宮崎縣、市當局のしめされた好意である。

その例：—1. 縣知事は、この日午後 1 時 25 分發の列車で東京へむけ出發される豫定のあわただしいなかにあつて、縣廳における天長節式典のあとのわずかの時間をさいて、大會に臨席、名譽會頭として、皇紀 2600 年祝賀の式につらなり、式辭をよまれた。

2. 市長は、市役所の天長節式典を、いつもより 1 時間くりあげて、9 時にひらき、この大會の席に、最初の天長節式典からつらなり、祝辭をよまれた。

3. 市観光係の好意もわすれられない。準備委員會に對し、いろいろ力をそえられたそうであるし、そのうえ、晚餐會の席には、係主任の長友勝美氏が出席して、齒科醫の岡本徹夫氏（尺八）、北支開原から歸國中の山内敏子嬢との trio で、この trio でビクターのレコードにふきこんだ日向の民謡「稗搦節」、「切干苳」などを聞かせてくださるとゆうもてなしかたであつた。

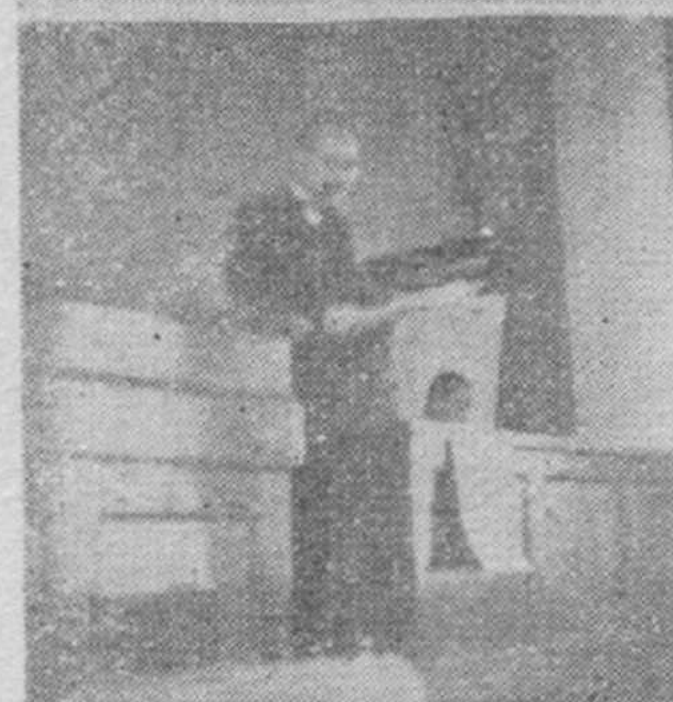
*

参加者の範圍。1. この大會には、出席ができないことがわかつていながら、この意義ふかい祝賀大會に對し、はるかにくわわる意味で、参加費をおくつたひとが、ひじようにおうく、實



會 場 へ

(モデルは進)
(藤静太郎氏)



祝 典 式 辭

(名譽會頭)
(長谷川知事)



協 議 會

(教育會館で)



畫 餐

(公會堂で)

際出席者約 100 人に對し、不在參加者は約 200 人におよんだ。これは、いままでに例のないことである。

2. 滿洲國からの出席者が、4 人もあつたことは、特に注意すべきことであろう。新京の住吉勝也博士、瓦房店の由比忠之進氏の出席は、いつもの熱心さからかんがえて、豫想されたこととしても、はるばるハルビンから、S-ro Kio こと、かつての日の何盛三氏が、あいかわらず元氣にみちた童顔をみせられたことはおもいがけぬよろこびであつたし、新京の荒川銚次郎氏が、老體をはこばれたことも、ありがたいことであつた。

3. 群馬縣から 3 人の karavano, そのなかに 20 年もエスペラントをやりながら、大會に顔をだしたことのない木戸又次氏が、とうく、この大會にでむいてこられたことは、うれしいことであつた。

4. 長府の野原先生のお顔は、ことしも、あいかわらず見られた。大會のすこしまえ、かぜのため、おやすみになつていたと、きいていたのであつたが。大阪から、いつもの顔ぶれのほか、藤間常太郎氏が出席されたのも、めずらしいことのひとつ。富山縣から野村理兵衛氏といつしよに出席された岩田宗一郎氏も、ちかごろ、めずらしい。

5. 正式の參加者のほかに ne-esperantistoj の傍聴者をいれたことは、demonstracio あるいは manifestacio として、よいおもいつきであつた。

*

會議の進行ぶり。1. 會議の進行ぶりのなめらかであつたことは、ほとんど、例のないほどであつた。その日わたされたプログラムにのつた議案のかずは、11 件もあり、そのうえ、緊急動議による提案が 2 件もあつたにかかわらず、議事は、きわめてみじかい時間にすらすらはこんだ。

これは、ひとつには、議長中川勝八氏が、「たくみに」とゆう副詞はもちいられないにしても、あぶなげなく、そして、それより、もつと重大なことは、なんの「ケレン」や「ごまかし」なしに、誠をもつて、その職務をとげられたことによるし、ひとつには、議場全

體に、協調の精神が支配していたからであつた。それゆゑ、決して妥協的でなく、對立した意見ははつきり對立したままに出し、ただすべきところは嚴重にただして、なおざりにするところはなかつたのであつたにもかかわらず、いつもの大會によく見られる感情のゆきちがいがまつたくなく、答えるものの答辯技術のまづいところは、質問するものがたすけて、その意をつくさせるとゆう、うつくしい光景さえ見られた。

また、會議にさきだつて、準備委員會で、よく、てはずをつけておいたことも、その理由としてあげなければならない。

2. 大會宣言がおこなわれたことは、いままで、あまり例のないところである。この宣言に、こののちの 에스ペラント運動の、あたらしい出發點を期待したい。

3. 議事は、原則的には、いつものように、エスぺラントでおこなわれたが、エスぺランティスト以外の傍聴者にも興味をあたえる部分においては、日本語ももちいられたことはよいおもいつきであつた。この點に iniciativa をとつた進藤氏のあざやかさには、いつもながら、感心させられた。

4. 緊急動議ふたつのうち、ひとつは、中國新政府に對し、その創立について祝電をおくることで、これが滿洲國側から出されたところ、特に興味があり、もひとつは、聖地觀光さきのひとつである高千穂町に對し、大火見舞金をおくることで、よいとりはからいであつた。いずれも、満場一致で可決されたことは當然のことながら、ごころよいことであつた。

(三宅史平)

いざ出發

(宿舍のまえで)

バスを待つ

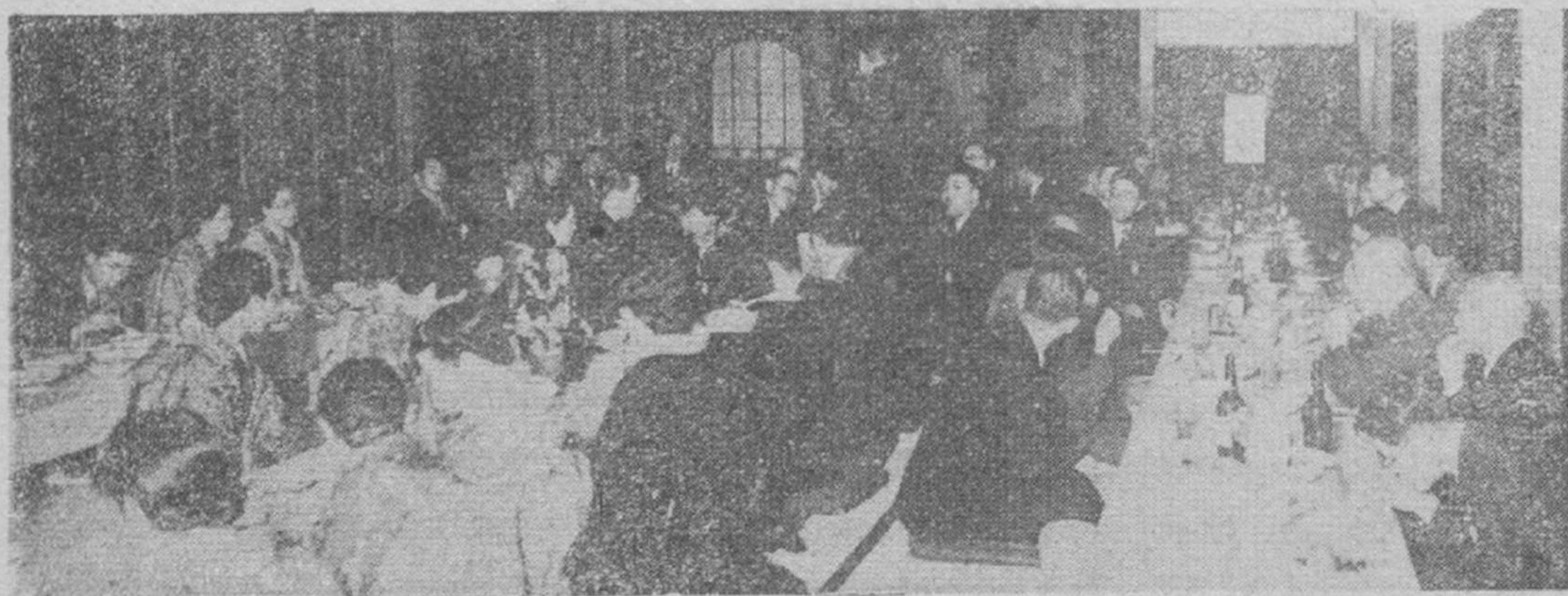
(おなじ)

八絃一字

(鶴戸青島班)



晚餐會 (富士越で)



Por la Amikeco inter Japanujo kaj Brazilo

Mesaĝo el kaj al la Brazilaj Esperantistoj



S-ro J. Dubieux ĉe Imperia Hotelo, Tokio

Brazila Ligo Esperantista adresis al Japana Esperanto-Instituto mesaĝon per s-ro João Baptista Dubieux, kiu vizitis nian landon en aprilo kiel membro de la brazila vizitanto rigardi la japanan kulturon.

La XXVIII-a Japana Esperanto-Kongreso, Miyazaki, 29, aprilo, faris kun unuanima aprobo respondon al la brazilaj samideanoj kun la subskriboj de la tuta kongresanaro, inkluzive de la guberniestro de Miyazaki, honora prezidanto de la kongreso, kaj la urbestro de Miyazaki kaj aliaj eminentuloj, patronoj de la kongreso.

El Brazilo

Estimataj Samideanoj!

Permesu, estimataj japanaj samideanoj, ke ni, viaj brazilaj amikoj, salutu vin, tiel mal-roksimajn en la spaco, sed tiel proksimajn en la kuneno.

La ĉielo bonvolu beni ĉi tiun sanktan ligitcon de esperantistaj koroj, kaj ke la komuna afero nin tenanta en sama rondo daŭru ĉiam pli viva kaj fine venku la barojn de la universala interkonsento.

En ĉi tiu maldolĉa horo, kiun ni vivas en profunda malĝojeco, ni firme

BRAZILO-JAPANUJO

D-ro Lourival Fontes

Ĝenerala direktoro de la Departamento de Gazetaro kaj Propagando de Brazilo

Antaŭ iom pli ol kvardek jaroj Japanujo estis ankoraŭ, por ĉiuj okcidentaj popoloj, legenda lando, limigita ĉe la pentrindaj urboj, plenaj de kioskoj kaj altanoj, kun paperaj muroj, kie fantaziaj virinoj, faritaj de mistero kaj nepenetreblaj ĉarmoj, kruciĝis kvazaŭ ambroj. La vento, iam kaj iam, sonigis la tegmentojn de la porcelanaj turoj, kiuj grandnombre ekzistis en la urbaj kvartaloj. La vojaĝaj libroj ion alian ne konis kaj la plezurigaj akvarelistoj prezentis al ni nur japanajn pejzaĝojn sur rizpapero kun anemiaj tonoj kaj koloraspektoj.

paŝu antaŭen kun nia standardo, kiu estas tiu iam levita de homo tre kara al ni ĉiuj.

Transdonas al vi ĉi tiun saluton nia komplezema samideano S-ro João Baptista Dubieux.

Brazila Ligo Esperantista

El Japanujo

Karaj Samideanoj,

Via kompleza mesaĝo, kiun vi sendis al ni per respektata sinjoro João Baptista Dubieux kaj kiun la sekretario de Japana Esperanto-Instituto ricevis ĵus antaŭ sia ekveturo al la urbo Miyazaki, al nia XXVIII-a Kongreso kaj portis al ĝi, faris al ni tre agrablan surprizon.

En la signifo festi la 2600-jaran jubileon de nia imperio, ni okazigis la kongreson nunjaran en la nomita urbo, la ĉefurbo de la provinco Hyūga, de kie venis nia japana gento.

Ni kolektiĝis sub nomitan Kolonon Fudamentan de Universo, starigitan memore de la jubileo, kiel simbolo de la paco de la mondo kaj frateco de la homaro.

Permesu, karaj sinjoroj, profiti la okazon por esprimi nian admiron pro via energia laboro kaj grandaj paŝoj antaŭen, kio devas esti modelo de ĉiulanda esperantistaro.

Kun salutoj de la tuta kongresanaro, ni sendas al vi mil dankojn pro via afableco kaj gratulon pro viaj brilantaj sukcesoj, de viaj koramikoj,

La XXVIII-a Japana Esperanto-Kongreso

Sed la energioj de la japana popolo, tuŝitaj de novaj idealoj, komprenante la mirindaĵojn, kiujn realigas la laboro, ŝanĝis, en malmultaj jaroj, la malnovajn konceptojn kaj bildojn, tiamaniere ke Japanujo povis sin prezenti antaŭ la okcidentaj popoloj, progresema kaj kulturita, kun justa fiereco pri sia valoro. Per spiritakreco kaj inteligenteco, rapide infektitaj de la entuziasmoj, kiujn la diversaj aroj da klarvidaj ŝtatestoj kaj patriotoj instigis, la japanoj sin altrudis kiel kapablaj je ĉiuj realigoj asimilante la kulturon rikoltitan ĉe la Okcidento, tiamaniere ke iliaj industrioj havis neatenditan progreson kaj ilia kolektiva riĉeco atingis de tiam la ekstremojn de la komforto. De tio ĝis ĝi fariĝis potenco kapabla agi en la internacia ekvilibro dependis de malgranda peno. Pere de mirakloj, kiujn nur la patriotismo klarigas, Japanujo plenumis miregindan programon, plibonigante la instruadon, kreante superajn lernejojn, fondante ĉiuspecajn institutojn, sciencajn, artajn, plifortigante la produktantajn

La ĉerko de S-ro Perdis

TABATA-Kisaku

Ĉu vi iam legis la verkon de E. A. Poe, "La ruiniĝo de la domo de Asher"?

La nova speco de ĉerko, kiun ellaboris Funebristo Perdis, multe ŝuldas al tiu novelo laŭ la vorto de li mem. — Kiom multe da homoj estas funebre enterigataj sub la stato de ŝajna morto; — li diras, — ili estas mortkondamnitaj nur pro tio ke ilia koro jam ne funkcias. Tie kuŝas la difekto de la moderna medicino! Donu ŝancon al la nemortintaj mortintoj. Jen estas preta mia ĉerko por ties uzo. — Tiel parolis la funebristo, okaze de la intervuo kun scivolemaj ĵurnalistoj.

Nun mi klarigos al vi, karaj legantoj, pri la ĉerko, kiun mi temas. Unuvorte ĝi estas malgranda ĉelo kun lito interne: ĉe la muro pendas telefonaparato, kiu interkomunikiĝas kun tiu de la funebrista oficejo; ĉe la tegmento sin trovas ventolilo kun longa aleto, por konstante refreŝigi la aeron en la interno. — Ĉio ĉi estas aranĝata por ke la mortinto ne ĉagreniĝu kiam li reviviĝos.

Nu, prezentu al vi la scenon, kie turniĝas aleto de ventolilo, elstaranta el sub la tero, kun kraketoj inter mutaj tomboŝtonoj! Estas ja kompreneble, ke oni legis kun ĝemo sur la vespera eldono de la urbaj ĵurnaloj pri la mirinda ĉerko, kiun la homa historio ankoraŭ neniam vidis.

La sekvantan matenon, antaŭ la butikoj de S-ro Perdis, haltis aŭtomobilo helkolora, el kiu eliras mezaĝa viro.

fontojn, trudante la normojn de kulturo refreŝigita de la modernaj idealoj. Rapide, nur en duona centjaro, la beletristiko, la sciencoj, la industrioj kaj la komerco mirinde vigliĝis, donante al la japana popolo la impulsojn, kiuj konsistigas la sekreton de la grandaj kaj konstantaj realigoj. Izolita, en insuloj, en nesufiĉa teritorio, Japanujo devis plivolumeniĝi tra la Oceanoj. El tio rezultis la potenca komercŝiparo, kiun forta militŝiparo devis protekti. La japana popolo trovis la marajn vojojn, kiuj simpligis la asimiladon de ĉio, kion la okcidentaj popoloj realigadis, ĉe la ĉiutagaj laboregoj por la konkero de la komfortoj. Hodiaŭ Japanujo havas grandegan influon ĉe la internacia ordo. Tiu influo devenas precipe de ĝia produktanta kapablo, kiu partoprenas

— Lia sinjora moŝto favoras vin per la mendo de via nova ĉerko; — li tuj komencis, — ĉu vi bonvolus ve i kun mi?

— Volonte, Sinjoro. — respondis la funebristo afable.

Ii ekrajdis. Dum la vojo la viro rakontis al li, ke lia masro estas S-ro Alkolo kaj li estas grave malsana pro kronika nefrito, cetere li estas dipso-manio, ktp. ktp.

La funebristo diris al la akompanto, ke li ne iros plu, kiam li aldis la nomon de S-ro Alkolo, ĉar li timas lin pro la famo, ke S-ro Alkolo estas kona' a avarulo de la kapo ĝis la piedoj.

— Estu trankvila, S-ro Perdis. — diris la akompananto, vidante la konfuzi-on de Perdis, — Kia ajn li estus, li ne sentos sin komforta en nepagita ĉerko.

— Ja, ja, la samon mi opinias, — la funebristo forbalais sian maltrankvilon. Ili alvenis la domon de Alkolo. La malsanulo kuŝis sur la lito; oni povis vidi morton alproksimiĝanta super lin. Li diris al la funebristo:

— Mi havas peton al vi.

— Kion vi deziras, Sinjoro? — demandis Perdis.

— Metu por mi botelon da viskio apud mian kadavron en la fermita ĉerko.

— Laŭ via ordono, Sinjoro Alkolo.

— Mi volas drinki el la botelo, kiam mi reviviĝos.

— Mi esperas, ke tio realiĝu.

— Mi nepre reviviĝos, se ne —, subite li interrompis sin. Be' aŭro pri la forlasota riĉaĵo eble lin turmentis. Li daŭrigis: — mi donacos al vi duonon de mia tuta havaĵo, kondiĉe ke via ĉerko centprocente utilos al mi.

Post kelkaj horoj S-ro Alkolo mortis: Oni enmetis lian kadavron kune kun botelo da viskio en la ĉerkon de S-ro Perdis kaj ĝin enterigis funebre en

Neniu ne scias la ekonomiajn ligilojn, kiuj nuntempe nin ligas al Japanujo, kiam ĝiaj merkatoj postulas grandan parton de niaj kotonaj rikoltoj kaj la niaj postulas la produktojn de ĝia industrio, simpla kaj efika armilo kontraŭ la prezaltiĝoj. Kreinte bonegan ŝiparon, kiu senin'errompe marveturas, Japanujo forigis la barojn de la distancoj. Ĉiuj tiuj faktoj klarigas kaj pravigas la intereson, per kiu Brazilo akompanas la japanan progreson kaj serĉas respondi al la simpatio de la japanoj, kies kolonio, kunligita kun ni, ĉiam kreskadas.

(Fronta artikolo de la ilustrita revuo "Brazilo-Japanujo", oficiala organo de la Instituto Brazila de Japana Kulturo, ĉe la Placo Getulio Vargas, 2-1^o andar. Rio-de-Janeiro. La esperanta traduko aperas samtempe en "O Brasil Esperantista", la organo de Brazilo Ligo Esperantista, kaj en "La Revuo Orienta" de Japana Esperanto-Instituto.)

la tombejo apud la urbo. (Mi ja devas aldoni ke Perdis ne forgesis ricevi la pagon por la ĉerko.)

“La tuta duono de lia havaĵo” — tiu ĉi penso persekutis la funebriŝton kiel sonĉo sorĉiga. Pasis du tagoj, — kaj nenio okazis.

En la meza nokto de la tria tago, S-ro Perdis vekigis el profunda dormo, li ekaŭdis sonoradon de la telefono. Li desaltis de la lito por preni la ricevilon.

— Hallo!

Sekvas nenia respondo.

— Hallo! Kiu vi estas?

Silento. — Nur la kvieto de la nokto regas la teron. Li furioze movadas la tenilon de la ricevilo, aŭskultas vane, denove tintigas la tenilon, ekdubas pri siaj oreloj kaj fine konkludas, ke li nur sonĝis.

Li revenas al sia lito kaj baldaŭ endormiĝis. Venis mateno kun ĉielruĝo.

Sentante ke ankoraŭ io pendas en sia koro, li decidis priekzameni la ĉerkon. Li telefonis al la policejo petante ke oni ĉeestu la eltombigon.

En la tombejo estis plena de homamaso por vidi la scenon. S-ro Perdis iras tien kaj reen senpacience dum la fosistoj laboradas. La korpulenta poliestro elprenas mantukon el la poŝo kaj viŝas la ŝvitojn ĉe sia frunto, plendante je la brovega vetero. Haltis krakoj kaj bruado. La ĉerko malfermata! Jen frapas ĉies okulojn la kadavro de S-ro Alkolo!

Lia dekstra mano forte prenas botelon de viskio kiu estis jam malplena, — dum la alia tenas la ricevilon de telefono por demeti ĝin.

Ŝajnas ke, post la enteriĝo, efektiviĝis la miraklo de reviviĝo. Estante ebria de la viskio, li kredeble alpaŝis al la telefono por preni la ricevilon kiam lin ekatakis la paroksismo.

Laŭ la diagnozo de ĉeestanta doktoro, lian morton kaŭzis la fatala cerba hemologio.

Nun la espero forflugis flanke de S-ro Perdis. La babilemaj urbanoj disputadis pri miliono da riĉaĵo kiun postlasis la avara mortinto. De tiu tempo disvastiĝis famo, ke en la urba tombejo, de tempo al tempo, oni vidas la fantomon de S-ro Alkolo, vaganta kun botelo de viskio, balbutanta ion ne kompreneblan.

Adam Mickiewicz

—La plej granda pola poeto—

(aŭrigo)

Boleslaw Szczesniak

Lektoro de Rikkyō Universitato



Portreto de Mickiewicz

(de Wankowicz, 1799-1842; Muzeo Narodowe)

La juna bata'anto ne fidis al la kapableco de la legantoj, tial li donis ĉiujn klarigojn en "Gradyňa" kaj en la enkonduko pri la esenco de la romantika poezio, li lerte diskutis kaj li aldonis poezion (inkluzivante citaĵojn el la polemikoj de Griadecki), kritikantan la klasikulojn. Tiuj restis silentaj, almenaŭ dum la presado; ili respondis en la saĝonoj per serĉoj kaj kalumnioj; la juna generacio restis silenta, la junuloj legis la "Baladojn" kaj "Dziady", kio fariĝis kvazaŭ manio. Ili provis lin imiti, sed ili ne sukcesis bone kiel la aŭtoro.

Krom ĉi tiuj du volumoj la poeto skribis, en la sama tempo, poemon por la asocio de junaj studentoj, nomata "Filaretoj", kiu estis branĉo de la granda asocio nomata "Filomatoj"; ĝi iris de buŝo al buŝo, precipe la "Odo al la

polemiko 論戦
klasik'ulo 大家

filareto 道德愛好者
filomato 好學者

odo 抒情歌の一形式
al'mezuri あわせる

juneco", raskita de idealoj de Schiller, vokante de sonĝo al realeco per ŝanĝi la vizagon de la mondo. Ĝi almezuris kapablojn al idealoj, sed ne idealojn akorde al la kapabloj, ĝi vekis senkonscie, tra la bildo de libero, ĉiujn kapablojn, ĝi revoluciigis la sentojn.

Mem la poeto sentis sin pli kaj pli mabone. La sanstato pli malboniĝis. La okupo de instruisto lacigis lin; la vundo de amo ne resaniĝis; li forĵetis Schiller kaj la idealojn kaj komencis legi nur Byron, kiu abomenis la mondo¹⁾, kiam subite, la 23-an de oktobro de la sama jaro (1823), li estis enĵetita en karceron, kaj poste, dank' al la propeto de Sjevel kaj la defendo de siaj kolegoj. Lau kaj aliaj, kiuj prenis la tutan kulpon sur sin mem, li estis liberigita, sed li estis kondamnita al forlaso: la juĝa esploro farita pro infaneca aventuro malkovris la organizon de "filomatoj". Sed en la karceraro la poeto estis renaskita kaj reakiris la sanon, kaj kiam, la 24-an de oktobro, 1824, li forlasis Wilnon (por eterne) al Peterburgo, li forŝiris de si la pasintcon kaj ekiris vivon denove kun nova kredo. La sorto estis, en la fakto, multe pli favora; en la nova rusa ĉirkaŭantaro, kie li estis bonvenigita de la konspiremaj junuloj kun granda koro, en la "granda mondo" de Odessa, Moskvo kaj Peterburgo, dum la vojaĝo al la kolrica Krimeo; la eksinstruisto de Kowno kaj nova malgrava oficisto de la Fremda Oficejo, li ekkonis la mondon kaj novan popolon. Li observis de proksime la malamikon kaj lian grandegan potencon; li vestis maskon de lojaleco sur siajn dirojn kaj skribaĵojn; li ĉerpensis pri pol-rusa kunlaboro en la literatura mondo; li lernis, kiel malproksime la Varsovia mondo staras pli malantaŭe ol la rusa, kiel multe liaj propraj kapabloj kreskis (liaj bonegaj improvizaĵoj pruvis ĝin, kiu estis fieranta, en pli malgranda kvanto, jam en Wilno). Li koncentrigis sin kaj skribis multe. Li eldonis unue "Krimajn sonetojn" (1826), en kiuj la nova Childe Harold kunligis la bildon de siaj propraj sentoj, pasioj, duboj en stranga vojo kun la mirindaj orientoj pejzaĝoj, en la plej malfacila formo de soneto aldonante al la estetikaj impresoj erotikajn el la tagoj en Odessa. La kritikistoj estis silentaj malpli ol antaŭe, sed kritikis la mirindajn orientajn scenojn, aŭ eltrovis diversajn difektojn, sed la junaj faŝis de la balado-manio en la sonetomanion, kun malpli bona rezulto por si mem; la klasikuloj, kiel antaŭe, estis kritikemaj, sed nur en salonoj. Pli poste (1828) "Konrad Wallerod" estis skribita; ĝi trapasis la cenzuron malfacile; la klasikuloj kritikis ĝin pli arde en la salonoj, sed la junaj estis entuziasmaj. Poste la poeto revenis al la

temo de “Grazyna”, al la bataloj de litovoj kun la kruckavaliroj, sed ĝi estis tre multe diferenca en penso kaj arto, tre multe pli alta! Estis glacio en “Grazyna”, fajro en “Wallenrod”; la mallonga, kvietra rakonto de unu nokto kaj unu tago estis anstataŭita de vizio de strangaj bildoj; la pejzaĝoj ŝanĝiĝis de la dolĉa, kvietra naturo apud Niemen al la minaco de neĝŝtormo (1812), de popularaj moroj al teruraj, tragediaj humanaj suferoj pro la amo al la patrujo, la paganisma amo, ne kalkulanta kun ia ajn skulpulo, nur por esti savita antaŭ la venonta pereco. La centokulaj cenzuraj Argusoj devigis la poeton al ĉiuj-cedoj. Kion li estus konfesinta per si mem, li metis en la “Festenon”, kiu, kompare al la aliaj ĉapitroj, kreskis ekstreme, ĝis la difekto de la arkitektura tutaĵo. Estis ankaŭ aliaj mankoj — la amokonfeso de malnova paro ne estis en ĝusta loko, nek la kristano, kiu forgesis sian kredon; li piedpremis ĉiujn siajn sentojn. Ĉu oni povus savi sian landon en tia maniero? Sed kio estas tiuj ĉi duboj antaŭ la ideo mem kaj antaŭ la realo, tio estas, perloj kaj diamantoj de poezio, kiujn la poeto disĵetis per malavara mano, antaŭ la sonoranta voko al la devo por la patrujo; la juna popolo sentis ĝin pleje, la klasikuloj plej timis ĝin, kaj Nowosilcow severe kondamnis tion. Kvankam la temo estis mozaika, el libere kunmetitaj anekdotoj, la sensacio estis tiel forta, ke la tendenco de la tuto erarigis la atentemon de la cenzuristo (ne de Nowosilcow!). La poezio transpasis la estetikajn celojn; ĝi celis agon, kiu fariĝis vera en la nokto de novembro 1830; neniam la poezia bildo estis tiel forta. Kaj la malnovaj poeziaj verkoj perdis sian lumon antaŭ “Wallenrod”, per la forto de liaj vortoj, la varieco de la formo, la diverseco de la plej belaj bildoj, de la profundeco de la penso.

Dum la restado en Rusujo, la poeto verkis ankaŭ malgrandajn poeziojn, baladojn kaj fabelojn, novan tradukon el la araba kaj la improzitaĵojn “Kasyde”, “Farys.” Kun la sentimeco en la batalo kun la kreskantaj fortoj de la dezerta naturo, kun la forto de sia volo, li atingis la celon de libereco. Li skribis ankaŭ skizojn el la rusa realeco, sed li kaŝis ilin zorgeme. Dum sia restado en Rusujo li aŭdis kritikojn pri sia poezio en sia lando, kiu instigis lin perdi paciencon; li do batalis kun la kritikoj en sprita antaŭparolo de la nova poezia verko, en kiu li rakontis, kiuj estis kulpaj, kaj ke tiuj, se ne estis miopa, estis stultaj kaj kun malnovmodaj opinioj. Dank’ al la helpo de la moskvaj amikoj (Zukowski, la kortega poeto, kaj aliaj), li ricevis pasporton kaj forlasis Peterburgon en majo 1823, veturante per maro al Germanujo. (daŭrigota)

バイロンが、スペイン、マルタ、ギリシア等を遍歴して出した詩集で、「一朝目覺

むれば」その名が天下に高かつた出世作
paganisma 偶像崇拜の

kalkuli kun 考慮に入れる
Arguso 百眼の怪物

Prof. K. HAMADA

Tagiĝo de Orientazia Civilizo

de arkeologia vidpunkto

Trad. N. KAWASAKI

Rim. de tradukinto: Bedaŭrata Prof. HAMADA estis rektoro de Imperia Universitato de Kio-to kaj tiun ĉi lektion li faris en 1928. Post ĝi estas kelkaj gravaj eltrovaĵoj, sed esence ĝi estas utila kaj interesa eĉ nun.

1. Antaŭparolo

Antaŭ ĉirkaŭ ses jaroj mi traktis la saman problemon sub simila titolo.¹⁾ Kaj kiam mi enmetis ĝin en mian verkon, kolekton de diverstemaj artikoloj, mi rimarkigis, ke mi publikigoj iam korektojn, necesajn pro multaj novaj studoj aperintaj post ĝi.²⁾

Kaj la kialo, ke mi elektis tiun ĉi titolon por mia lekcio, estas unue mia kredo, ke tiu ĉi problemo estos plej interesa por vi, due mia volo korekti kaj pligrandigi mian antaŭan traktaton. Tial mi avertas vin, ke en tiu ĉi lekcio multaj punktoj estos tute samaj kiel en la antaŭa traktato kaj samtempe ne malmultaj estos ŝanĝataj aŭ pligrandigataj. Kompreneble ĉiujn ŝanĝojn en miaj opinioj mi klare montros.

Nun ni ne bezonas diri, ke Ĉinujo, la centro, kaj Korea Duoninsulo kaj Japana Insularo, ĝiaj orientaj najbaroj, formis, pro siaj geografiaj situacioj, de antikva tempo, unu tute komunan kulturgrupon, sed kiel tiu ĉi orientazia civilizo naskiĝis, per kiuj vojoj ĝi disvastiĝis al ĉiuj partoj de tiu grupo, kaj en kiuj epokoj?—ili estas problemoj tre interesaj por ni. Lastatempe diversaj natursciencoj, kultursciencoj, precipe arkeologia^a tiel progresis, ke tiuj problemoj estas sur la vojo de solviĝo per la laboroj de sciencistoj en tiuj fakoj, sed kompreneble la plena rezultato estas lasata al estonteco. Nun ni povas diri almenaŭ, ke, kvankam ne perfekte kaj ne plene, multaj dubaj punktoj komencis foriĝi en scienca lumo, kaj esp'oro pri "tagiĝo de orientazia civilizo" mem eniris en la epokon de tagiĝo. Tial hodiaŭaj hipotezoj^b kun ma'sufiĉa materialo akiros pli da certeco, post trovo de riĉaj atestaĵoj, kaj eraraj supozoj, eĉ se ili mem estos detruataj, fariĝos ekirpunktoj, el kiuj ĝustaj opinioj estos

formataj. De nun mi parolos nur skize, ĉefe de arkeologia vidpunkto, kiajn observojn mi povas fari per la hodiaŭaj konoj de la sciencoj, speciale kiajn opiniojn mi havas, pri la civilizo de Ĉinujo ĉefe, tiuj de Koreujo kaj Japanujo krome, t.e. pri la orientazia civilizo.

Noto (1) Sur la tagĵurnalo "Osaka Asahi", 1922 jan. La samo en "Asahi Sinnen Bunsyū" (朝日新年文集).

(2) Mia "Kudara Kannon" (百濟觀音), 1926.

2. Paleolita epokoc en Orienta Azio

Tio, ke la historio de natura disvolviĝo de homa kulturo havis tri kultur-epokojn, t.e. ŝtonepokon,^c bronzepokon^d kaj ferepokon,^e estas fenomeno preskaŭ tipe okazinta ne nur en Eŭropo, sed ankaŭ en Azia Kontinento. Kompreneble iaokaze ekzistis iom nenormala disvolviĝo, kiu, ne spertinte uzadon de bronzaĵoj, rekte eniris en ferepokon, sed tio, ke antaŭ eltrovo de metala uzado ekzistis epoko, en kiu homoj faris instrumentojn el ŝtono, estas preskaŭ nedubebla laŭ supozo bazita sur la praktiko de nuntempaj barbaruloj.

Do ĉiu povas supozi, ke en Ĉinujo antaŭ apero de la brila metalkulturo en la epokoj Chou^f kaj Han^g, ĉar Ĉinujo ne estis senhoma lando, ĉu per Hangentanoj, ĉu per aliaj, ĉiuokaze ekzistis ŝtonepoka kulturo ankaŭ tie. Plie, la lastatempa tendenco de la sciencoj, kiu serĉas la lokon de unuafoja apero de homoj en la altebena de Azia Kontinento, t.e. en la regiono de Centra Azio al Mongolujo, pli kaj pli donas al ni esperon eltrovi en Ĉinujo restaĵojn de la plej malnovaj homoj. Nome, kontraŭe al ĝisnunaj multaj sciencistoj, kiuj serĉis ĝin en la okcidenta parto de Eŭropo aŭ en aliaj, la teorio, ke ne arbaro, sed seka altebena regiono, t.e. Centra Azio aŭ Mongolujo estas la origina loko de homoj kaj ankaŭ de ĉiuj malnovaj grandaj mambestoj^g, komencis akiri potencon. Tiu usona doktoro S-ro Henry Fairfield Osborn estas ĉampiono de tiu ĉi teorio. Mi pensas, ke vi ankoraŭ havas freŝan memoron, ke jam li fine sendis grandan ekspedicion al la mongola regiono kaj la sciencistoj, ekzemple S-ro Roy Chapman Andrews, alportis gravajn rezultatojn unu post la alia. Malfeliĉe la fina rezultato de tiu ekspedicio ne sukcesis eltrovi restaĵojn de la prapatroj de homoj mem, sed ĝi multe plifortigis la konvinkon, ke la origina loko de homoj estas en la regiono de Centra Azio. Ĉiuokaze, tio, ke el multaj partoj de Azia Kontinento Centra Azio, kiu estas proksima al

c 舊石器時代

f 周

ĉ 石器時代

g 漢

d 青銅器時代

g 哺乳動物

e 鐵器時代

Ĉinujo, estas supozata kiel la origina loko de homoj, estas afero por ni tre interesa.¹⁾

Sed eĉ se ni flankenlasas la gravan problemon, kie estas la origina loko de homoj, problemo, ĉu tiaj restaĵoj de paleolita epoko, t.e. la plej malnova ŝtonepoko, kiaj estas ofte troveblaj en Eŭropo, ekzistas ankaŭ en Ĉinujo, estas nepre esplorenda. Tiu paleolita epoko estas tiu, en kiu homoj vivis, uzante nur plej primitivajn nepoluritajn^h ŝtoninstrumentojnⁱ, kune kun mambestoj jam plene ekstermiĝintaj aŭ ŝanĝintaj sian vivregionon. Ĝi estas epoko tiel malnova, ke ĝi estas rigardata kiel almenaŭ antaŭ 20.000 jaroj. Sed ĉirkaŭ Ĉinujo restaĵoj, kiuj povas atesti ekziston de homoj de paleolita epoko, tute ne estis konataj ĝis antaŭ kelkaj jaroj. Sed en mia malnova traktato mi opiniis, ke eĉ se nun ni ne povas havi aŭtentikajn restaĵojn de paleolita epoko en tiu regiono, estonta eltrovebleco en tia vasta kaj science ankoraŭ ne esplorita regiono ne estas tute neigebla, sed plie en teorio ĝia ekzisto ne povas esti malakceptata. Efektive, de antaŭ kelkaj jaroj eltrovoj de restaĵoj de paleolita epoko ĉirkaŭ Ĉinujo estas raportataj unu post unu kaj tio estas tre admirinda kaj gojinda.

Nome, en Siberio, kiu estas nordokcidente de Ĉinujo, en la distrikto Minusinsk ĉe la supra fluo de la rivero Enisejo jam frue ekde 1886 S-ro Savenkov, S-ro De Bay kaj aliaj eltrovis paleolitajn restaĵojn, similajn al tiuj de la etaĝo Moustérien^l ĝis la etaĝo Aurignacien^k kaj poste en 1920 ankaŭ la tavoloj kaj la stato de la kunestantaj bestoj estis precize esplorataj de S-ro Merhart.²⁾ Post tio en 1924, en la distrikto Ordos, norda parto de Shen-Si^l, S-roj pastroj Licent kaj Teillard de Chardin, francaj sciencistoj, eltrovis kune kun aŭtentikaj skeletoj de bestoj, ekzemple mamutaj^m aŭ rinoceraĵojⁿ, ŝtoninstrumentojn, kies formoj estas rigardataj kiel tiuj de la etaĝo Moustérien aŭ de la etaĝo Aurignacien, kaj ni povas diri, ke tio estas la plej grava okazintaĵo.³⁾ Kaj ankaŭ S-ro Nils C. Nelson, arĥeologia specialisto en la ekspedicio de S-ro Andrew, eltrovis en Gobi-dezerto ŝtoninstrumentojn de la etaĝo Moustérien kaj krom ili eĉ pli malnovajn, kiuj povas esti en la etaĝo Acheuléen.⁴⁾ (Tiujn eltrovaĵojn el Gobi-dezerto S-ro Nelson bonvolis montri al mi en New York lastjare). Per tiaj eltrovaĵoj ni povis ekscii, ke almenaŭ en la regiono, de norda Ĉinujo ĝis Mongolujo kaj Siberio, vivis en tre antikva

h 磨研しない

i 石器

j 遺物

ĵ ムスチエー期 (前期舊石器時代第4期)

k オリニャク期 (後期舊石器時代第1期)

l 陝西省

m 舊象

n 犀

o アシュール期 (中期舊石器時代第3期)

tempo homoj, kiuj faris ŝtoninstrumentojn similajn al tiuj de la etaĝo Post-moustérien aŭ la etaĝo Aurignacien. Estas evidente, ke tiuj homoj ne estas tia malnova raso de la unua etaĝaro de paleolita epoko, sed apartenas al nuna homaro (homo ricens). Tamen ne facile estas diri, ĉu ili estas la prapatroj mem de Han-gento aŭ ne, kaj malpli aserteble estas diri, ke ili, du, estas absolute senrilataj. Cetere, en Japanujo kaj Koreujo tiaj restaĵoj de homoj de tiu epoko ankoraŭ ne estas eltrovitaj, sed teorie ni ne povas diri, ke tia eltrovaĵo tute ne estos en estonteco.

Komentaro Nur malmultaj libroj, kiuj troviĝas ĉe mi, estas citataj en tiu ĉi lekcio kiel konsultaj libroj.

1 Osborn; Man rises to Parnassus, Critical Epochs in the Prehistory of Man. (1928)

2 Merhart; The Palaeolithic Period in Siberia; Contributions to the Prehistory of the Yenisei Region, translated by Mac Curdy. (American Anthropologists, 1923).

3 Licent et Teilhard de Chardin; Le Palaeolithique de la Chine. (L'anthropologie, 1925) Boule, Breuil, Licent et Teilhard; Le palaeolithique de la Chine (1928)

4 Nelson; The Dune Dwellers of the Gobi, (Natural History, 1926) Andrews; On the Trail of Ancient Man. (1926)

Rimarko de Tradukinto: En 1929 kaj 1930 en la volo de Chou-Kou-Tien^p (ĉ. 40 km sudokcidente de Peking) estis eltrovataj homaj restaĵoj. La kranioj similas al tiu de Pitekantropo^r, sed, ŝajne, pli nova ol ĝi kaj pli malnova ol tiu de homo Neandertala^s. La eltrovintoj donis la nomon Sinanthropus Pekinensis. Ili uzis fajron kaj ŝtoninstrumentojn, malsimilajn al tiuj de paleolita epoko en Eŭropo.

p 周口店

r ビテカントロプス (Simiohomo の意味, Java で発見)

s ネアンデルタール人 (最初ドイツのネアンデルタールで, その後ヨーロッパ各地で発見, もちろん現人類にあらず)

(廣告)

第2回小坂賞に輝く

城戸崎益敏著 エスペラント 第一步 (白水社版)

キク判 138 ページ・定價 1 圓 50 錢・送料 9 錢

著者が、これによつて輝く 2600 年の小坂賞を獲た獨修書。あたらしい規軸により、たれでも、みじかい期間に、たちまち、エスペラントを手にいれることができる。それと同時に、學修しながら、エスペラントに對する常識もゆたかになる機構になつてゐる。

・學會取次・

(245) 15

SONĜOJ EN DEK NOKTOJ

de Soseki NATUME

La tria nokto.

Jenan songon mi songis.

Sesjara infano mi portas sur mia dorso. Ĝi estas certe m'a fileto, kvankam mi, strange por diri, tute ne scias, ke ĝi fariĝis blukapulo pro la sian vidkapablon. "Kiam vi blindiĝis?" mi do demandas ĝin. "Jam de tre longe," ĝi respondas. Ĝia voĉo estas sendube tiu de infano, sed ĝia parolmaniero, komplete tiu de plenaĝulo. Krome ĝi parolas maldece, ega'e kiel mi.

Dekstre kaj maldekstre etendiĝas verdaj rizkampoj. Voĵeto estas malvasta. De tempo al tempo ombrosimile traflugas ardeoj en la mallumo.

"Inter rizkampojn ni nun enpaŝas?" aŭdiĝas voĉo sur mia dorso.

"Kial vi scias tion?" returnante mian vizaĝon mi demandas.

"Ĉar ardeo krias. Ĉu vi ne aŭdas ĝin?" ĝi respondas.

Kaj ĝuste tiam ardeo efektive krias du aŭ tri fojojn.

Mi iom ektimas pro la infano, kvankam ĝi estas certe m'a fileto. Kio al mi okazos de nun, portante tian ulon? Mi do rigardas for antaŭen, serĉante lokon por forlasi ĝin, kaj jen mi povas distingi grandan arbaron en la mallumo. "Tie," mi ekpensas kaj ĝuste tiam aŭdiĝas mokrido "Hu-hum!" sur mia dorso.

"Pro kio vi rikanas?"

La infano ne respondas, sed nur demandas:

"Paĉjo, ĉu vi sentas min peza?"

"Ne peze," mi respondas.

"Baldau mi fariĝos peza," ĝi diras.

Silente mi nun paŝadas celante la arbaron. La vojo inter la rizkampoj neregule serpentumas kaj nin kondukas nur malfacile. La voĵeto baldau duiĝas antaŭ ni, kie mi haltas por iom ripozi.

"Ŝtono devas stari tie," diras nun la bubeto.

Kaj efektive staras ŝtono dika je ĉirkaŭ ok co'oj kaj alta je mia talio. Sur ĝia antaŭa supraĵo estas skribita: "Dekstren: al Hattabara. Maldekstren: al Higakubo." Malgraŭ la mallumo la ruĝaj literoj estas klare legeblaj; ili montras ruĝan koloron similan al la ventro de japana trito.

"Maldekstren ni iru!" ordonas la bubeto. Tie la arbaro ĵetas de la ĉielo sian ombran figuron sur niajn kapojn. Kelkan tempon mi hezitas.

"Ne hezitu!" denove diras la bubeto. Mi do vole-nevole ekpaŝas al la

arbaro. Pensante en la koro, kial ĝi, kvankam blinda, ĉion m'rinde scias, mi alproksimiĝis rekte al la arbaro. "Estas maloportune esti blinda!" aŭdiĝas voĉo sur mia dorso.

"Mi tial portas vin sur mia dorso."

"Mi vere dankas vin por via penado. Sed, estas ne agrable, esti ĉiam malrespektata de ĉiuj. Eĉ la patro min malrespektas!"

Mi fariĝas nedifineble maltrankvila. Mi do rapidas, por ke mi povu plej frue atingi la arbaron kaj forlasi ĝin tie.

"Kiam vi iros plue, vi komprenos ĉion! — Estis ĝuste tia vespero!" ĝi kvazaŭ al si mem diras sur mia dorso.

"Kio?" konfuzite mi demandas.

"Kio?" la knabeto moke ripetas, "vi ja bone tion scias!" Tiun momenton mi eksentas kvazaŭ mi jam sciis tion. "Jes, en tia vespero tio okazis," mi sentas nur ne klare. "Jes, kiam mi iros plue, mi povos sciigi tion," mi sentas. "Kaj se mi tion komprenos, io devas okazi. Mi devas trankviliĝi, forlasinte ĝin antaŭ ol mi tion komprenas." Tiel mi pensas. Mi pli kaj pli rapidas.

Pluvas jam de longe. Malheliĝas pli kaj pli sur la vojeto. Mi estas kvazaŭ en deliro. Nur malgranda bubeto, algluanta sin al mia dorso, brilas kvazaŭ spegulo, kiu spegulas mian tutan estinton, estanton, estonton kaj nenion restigas. Malgraŭe ĝi estas mia fileto. Kaj ĝi estas blindulo. Mi fariĝas netolerebla.

"Ĉi tie! ĉi tie! ĝuste ĉe la radiko de tiu ĉi cedro."

Klare aŭdiĝas la voĉo de la bubeto en la pluvo. Surprizite mi haltas kaj trovas min jam en la arbaro. Kiel la bubeto diras, io nigra, staranta du metrojn antaŭ mi, ja estas cedro.

"Paĉjo, estis ĉe la radiko de tiu ĉi cedro, ĉu ne?"

"Jes prave," mi senvole konsentas.

"Estis en la 5-a jaro de Bunka*, en la jaro de Drako."

Mi ankaŭ sentas en la koro, "Vere, en la 5-a jaro de Bunka, en la jaro de Drako."

"Estis ĝuste antaŭ cent jaroj; vi min mortigis, ĉu ne?"

Apenaŭ mi aŭdis ĉi tiujn vortojn, konscio subite ekvekiĝis en mia kapo, ke mi antaŭ cent jaroj, en la 5-a jaro de Bunka, la jaro de Drako, en la vespero de tia mallumo, mortigis blindulon ĉe la radiko de tiu ĉi cedro. Kaj ĝuste kiam mi ekrimarkis, ke mi vere estis mortiginto, la knabeto subite fariĝis peza sur mia dorso kiel ŝtono de Zizo**. (daŭrigota)

Trad. de Eskulapida Klubo

* La 5-a jaro de Bunka: 1808.

** Zizo: Budaisma sanktulo (Ksitigarbo)

TAO-JUANMING

Trad. de MIJAKE-Ŝihej

Unua sceno: Loĝejo de Tao-Juanming.

En la centro malgranda loĝejo. Dekstre malplena ĉevalstalo. Inter la loĝejo kaj la stalo, troviĝas vojeto, kiu kondukas funden. Malantaŭ ĝi vidiĝas golfeto brilanta de la sunradioj. Maldekstre kampo trans barilo. Vidiĝas kamparano pluganta la teron. Sub la barilo floras krizantemoj. Diversaj iloj, puto, ktp., konvenaj por kampara domo. Interne de la loĝejo, maldekstre pendiĝas kurteno, kio faras la enirejon al la interno. En la ĉambro troviĝas tablo, seĝo, senkordharpo. En la antaŭo, Tao-Juanming, post malsano, kun infano sur la dorso, meditas, incitante per stango la fajron el miliacetrunkoj. Malantaŭ la loĝejo, bambuejo; flanke, persimonujo kun ruĝaj fruktoj, kvin salikoj. Sur la branĉo de la saliko sidas koko. Kvietaj kaj serena tago en la aŭtuno. Kun kokerikado la kurteno leviĝas. Unue momenta silento. La infano ekploras.

JUANMING: Hej, ne ploru. Ĉu pisi? Nu, momenton.

Li mallevas la infanon, iras al la kampo kaj helpas ĝin urini. Dum ĝia urinado, li rigardas la pejzaĝon.

KAMPARANO (*ekripozante*): Estas tre bela tago, sinjoro.

JUANMING (*kun milda rideto salutas*): Jes, vere bela vetero.

KAMPARANO: Ĉu vi jam tute resaniĝis?

JUANMING: Mi? Dankon. Mi jam preskaŭ tute resaniĝis. Tamen nur la korpo ankoraŭ ne reakiras forton. (*La infano ĝemas.*) Ĉu finite?

KAMPARANO: Tion kaŭzis, mi diras, ke vi dum kelka tempo havis liberon kaj poste subite ekhavis penan laboron.

JUANMING (*leviĝas kaj metas la infanon sur la dorson*): Ne, mi ne laboris tiel multe por nomi pene. — Per la terkulturado mi okupis min jam antaŭe. Se nur tiom da laboro mi sentus pena, tiam mia korpo devus esti kaduka.

KAMPARANO: Sed tamen, sinjoro, ĉe vi, denaske, la korpo kaj kapo estas diferencaj ol ĉe ni. Estas neeble, ke vi agas tute same kiel ni.

JUANMING: Ha ha, mi tamen ne laboras en tia signifo, kiel vi opinias. Mi nur faras tion, kio plaĉas al mi. (*Li malrapide paŝas kaj iras al la krizantemoj.*)

KAMPARANO (*kun rideto*): Ĉu vere? Al mi ŝajnas, ke ne estas tute

same, kiel vi diras. Ĉu ne, sinjorino? (*Li enrigardas la loĝejon.*) Ha, ĉu ŝi forestas?

JUANMING: Jes. Ŝi ĵus iris najbaren por aĉeti medikamenton.

KAMPARANO: Medikamenton? Ĉu por vi?

JUANMING: Ne. Por la patrino. Mi estas tiel sana, kiel vi vidas.

KAMPARANO: Hm. (*Kvazaŭ al si mem.*) Ne trinkante sakeon*, kiun vi preferas ol rizon? Fidela al la patrino. Vi estas. Vere.

JUANMING aŭdas la vortojn, tamen ne emas respondi. Ĉirkaŭ dekdu-tri jara knabo venas kun brulligno sur la dorso.

KNABO: Ho, malvarme! Diable malsate, kaj pro tio terure malvarme. (*Kun bruo li metas la lignon sur la teron kaj restas sidanta.*)

JUANMING: Ho, dankon. (*Li helpas demeti la lignon.*) Vi devas esti tre laca.

KNABO: Mi ne laciĝis, tamen ĉiuokaze mi estas malsata. (*Li levigas.*) Ĉu ne estas io manĝebla? (*Li varmigas sin per la fajro.*)

JUANMING: Estas bela manĝaĵo. (*El sub la fajro, li elrastas per stango bakitan bataton.*) Jen, vi vidas. Ĝi devas esti bakita bongrade.

KNABO: Ĉu batato? Estas dankinde. (*Li kelkfoje alspiras ĝin, rompas, kaj ekmanĝas.*) V-varmege. (*Li rimarkas la stalon malplena.*) Patro. Kie estas la ĉevalo?

JUANMING: Ĉevalo? (*Iom hezite*) La ĉevalon... mi vendis.

KNABO: Vere? Vi vendis ĝin. Finfine!

JUANMING: Hodiaŭ matene, tuj post kiam vi eliris, aĉetanto venis kaj forkondukis ĝin.

KNABO (*senkuraĝigite kaj malgaje*): Hum.

JUANMING: La ĉevalo tamen estas jam maljuna, kaj tiom ne taŭgas kiel antaŭe. Ne malĝoju. Baldaŭ mi aĉetos pli junan kaj bonan.

EDZINO venas kun medikamento. Ŝi aspektas konsumite.

EDZINO: Se tio ĉi estus via sakeo!

JUANMING: Ne gravas. Se la sakeo mankas, tiam mi nur ĝin ne bezonas. Ĝi ne povas esti komparata kun medikamento. Nu, rapidu kun ĝi al la patrino.

EDZINO eniras en la loĝejon.

KNABO (*iom kolereme incitas la fajron*): Ĉio ŝanĝiĝas en la medikamenton de la avino.

JUANMING (*ridetante*): Ne dru sensencaĵon. Pli ol la malsano de la

sakeo: Ĝenerala nomo de alkoholaĵoj japanaj kaj ĉinaj, precipe el rizo.

avino, tion kaŭzis, ke mi longe estis malsana kaj ne povis labori. Tamen jam bone. Se ni ree laboros kune, ni povos kovri tion.

EDZINO (*venas portante sub la brako bambukorbon kun rizo en ĝi*): La avino vin vokas.

La infano sur la dorso de JUANMING saltas kaj etendas la brakojn al la patrino. La patrino ridas kaj metas la korbon sur la teron, etendas al ĝi la manojn.

JUANMING: Ĉu vi iras? Al la patrino? (*Li donas la infanon al EDZINO*). Ha, nenio helpas. Kvankam mi estas en ĉiu rliato libera! — Almenaŭ ripozeton ankaŭ vi devas havi.

KAMPARANO: Hej, sinjorino. Ĉu la patrino estas tre malsana lastatempe?

EDZINO (*venas ĉe la puton kaj komencas lavpurigi la rizon*): Ne, sed ĉiam same. Ni ne bezonas timi, tamen ŝi kuŝas jam de longe.

KNABO: Estas senfine. Ni vendis kampon, vendis ĉevalon, kaj kion vendi en la sekvanta fojo?

KAMPARANO: Ha ha. Ne gravas. Ke nur unu avino malsanas longe. Nur se la patro estus daŭre en la ĉefurbo kaj restus ŝt toficisto, nenio gravus nur pro medikamento. Vi tiam ne bezonus vendi aŭ kampon aŭ ĉevalon. Tute facile.

EDZINO: Vi diras la veron, tamen...

KAMPARANO: Tiam la patrino devus esti tre ĝoja, kaj kiel senzorgaj ankaŭ vi estus! — Nu, mi jam iros tagmanĝi. Do, ĝis... (*Li malaperas maldekstren*.)

Aŭdiĝas de la malantaŭo bruo de knaboj. “Hej, alportu bastonon, bastonon!”, “Estas danĝere!”, “Vi falos!”

KNABO: Ah. Ankaŭ mi iros ludi kune.

EDZINO: Vi devas esti malsata. Mi tre baldaŭ donos al vi tagmanĝi.

KNABO: Ne necese — tiel rapidi, patrino. Mi manĝis bataton. (*Li eliras vigla*.)

Alia kamparano (DUA KAMPARANO), kun plugilo sur la ŝultro trairas la senejon, de dekstre al la kampo.

DUA KAMPARANO: Bonan tagon, sinjorino. Viaj krizantemoj havas belajn florojn.

EDZINO (*kun rideto kapklinas*): Jes, nur la krizantemoj. — Ĉar ili portis speciale grandajn florojn en la nuna jaro, ni esperis havi festenon en la tago de krizantemoj, sed...

DUA KAMPARANO: Parolante pri la festo de krizantemoj, mi rimaras, ke ĝi ja estas hodiaŭ. Ĉu ne? (*Li venas ĉe la fajron*.)

EDZINO: Jes. Tamen, ni havas malsanulinon ĉe ni, kaj cetere la festenon ni ne havos en la nuna jaro.

DUA KAMPARANO (*kompateme rigardas EDZINOn*): I a sakeon mi tamen povus alporti.

EDZINO (*honteme*): Do, ĉu vi...?

DUA KAMPARANO: Ne diru tion; foje mi devus alporti. Jam sen tio mi ja volis trinki por gratuli la sinjoron pro la resaniĝo. — Nu, kial la sinjoro rezignis tian brilan postenon, kaj retiriĝis en tian kamparon?

EDZINO: Mi povus diri, ke la posteno ne komvenas por lia karaktero. Kiom ajn li povas akiri monon per ĝi, kaj rango estas alta, li diras, li preferas facilan vivon de terkulturisto en la kampo, kvankam mankan, ol tian mal-liberan vivon.

DUA KAMPARANO: Ĉiuokaze la sinjoro estas stranga homo. Se mi diras veron — kvankam ne decus diri — li ne tre taŭgas por la kampa laboro. Kamplaboron povas fari ĉiu ajn, kaj tial tion lasu al ni, kaj la sinjoro servu kiel brila ŝtatoficisto en la ĉefurbo. Antaŭ ĉio, tio donas al nia vilaĝo grandan honoron... Nu, tion diras ne nur mi. Ĉiuj vilaĝanoj diras tion. Estas kvazaŭ kaŝi trezoron en la monto, ke oni lasas lin esti terkulturisto en tia vilaĝo; tute domaĝe...

JUANMING venas, kaj ili ambaŭ eksilentas.

JUANMING: Ho, bonaodoro! Tiun odoron de la fumo oni ne povas flari en la urbo.

DUA KAMPARANO: Kion vi preferas? Ĉu ĝin aŭ la odoron de sakeo, majstro?

JUANMING: Ho, vi estas sinjoro Ĉao; mi pensis, ke vi estas sinjoro Ĉou. (*Li ridas.*) Nu, do hodiaŭ vespere, rigardante la florojn de la krizantemo, ni prenu pokalon da... Ha, ne. Jam fariĝis mia kutimo diri "pokalon da" en ĉia ŝanco... Ha ha ha.

Ankaŭ EDZINO ridas malgaje. Tiam aŭdiĝas bruo en la malantaŭo, kaj el la voeto KNABO aperas la unua.

KNABO: Patrino! Grave! Venis ŝtatoficisto!

ALIA KNABO: Li venis el la ĉefurbo!

EDZINO (*kun miro*): Ĉu? Ŝtatoficisto?

JUANMING (*trankviligas*): Jen. La afero estis nur tia. — Mi antaŭsentis ion malbonan.

KNABO: Vi diris: "nur tia". Tamen li estas tre eminenta oficisto. Patro, li venis certe por vi.

ALIA KNABO: La boato ĵus alvenis.

TRIA KNABO: Li havas sekvanton.

JUANMING (*ŝajnige mirigite*): Ĉu jes? Tio ja estas grava afero! Li devas esti tre eminenta oficisto! (*Kun rideto li pikas al KNABO la vangon per la fingro*).

EDZINO: Ho, kio okazis? (*Rapideme ŝi eniras kun la korbo de la rizo sub la brako*).

ĈU-JIN, ĉefrevizoro de la imperio Tsin*, kun unu sekvanto, venas. Viroj kaj virinoj de la vilaĝo scivoleme sekvas lin.

JUANMING: Mi miris, kia reĝo venis, kaj jen vi estas! Vi, sinjoro Ĉu-Jin! (*Li mirigite ekstaras*).

ĈU-JIN: Jes, kiam mi venas al la kamparo, mi estus reĝo aŭ princo. (*Kun rido li riverencas respektplene*.) Longe mi ne vidis vin.

JUANMING (*riverencas same respektplene kaj mienas ĝoje*): Jes, tre longe. Ha, kia neatedita gasto!

La sekvanto humile riverencas. KAMPARANO tute humiliĝas murmurante en la buŝo, multfoje kliniĝas kaj retiriĝas. EDZINO ne portanta la infanon venas, viŝante la manojn. Ŝi riverencas.

ĈU-JIN: Ĉu mi havas honoron vidi la sinjorinon? (*Li ĝentile riverencas*.) Mi ĝojas vidi vin. Mi estas nomata Ĉu-Jin, kaj de longe mi estas tre intima amiko de sinjoro Juanming.

EDZINO: Bonventie! Al tia malpura loko! Vian altan nomon mi jam ofte aŭdis. — Bonvole internen!

JUANMING: Bonvole internen, ŝi invitas, sed tamen ni ne havas tian salonon por akcepti vin. Eble vi preferus tiun ĉi salonegon sub la blua plafono. Ankaŭ fajron ni havas ĉi tie.

ĈU-JIN (*kun rido*): Vere rigardinda estas la pejzaĝo por mi, kiu venis el la polvoplena urbego. Mi estas preskaŭ lacigita de la admiro al la pejzaĝoj sur la vojo. Ne estas senmotive, ke vi tiel sopiris hejmen. (*Li sidigas sur benkon proponitan de EDZINO*.) Ĉu tio estas la monto Nansan?

JUANMING: Jes. Ĉu ĝi ne estas bela monto?

ĈU-JIN: Jes, vere bela monto. De antaŭ horoj mi estas absorbita de ĝi.

JUANMING: Por mi ĝi estas tia intima monto, kia estas amiko de la infaneco. Nur se mi rigardas ĝin, mi forgesas ĉion kaj sentas min serena kaj facila. Kvankam oni ja povus trovi tian belan pejzaĝon ĉie ajn.

SEKVANTO (*al ĈU-JIN*): Mi do atendos vin, sinjoro, en la boato... Jen.

Tsin (晉): Dinastio en la antikva Ĉinujo, unu el la tiel nomataj Ses Dinastioj

(Li prezentas al li la portitan sakekruĉon)

ĈU-JIN: Mi cerbumis, kion mi portu al vi kiel donacon, kaj fine ĉi tion mi kunportis. Ĉar mi pensas, ke ĝi pleje plaĉos al vi.

JUANMING: Ho, tio estas mia sopirata sakeo el Lojang*. *(Li prenas ĝin en la mano, kaj en ĝojo ĝin levas.)* Nenio pli ĝojigas min. *(Li turnas sin al EDZINO.)* Jen, tial oni diras, ke feliĉo kaj malfeliĉo vizitas alterne.

EDZINO: Vi diras la veron. Kian belan feston nun ni povas havi.

SEKVANTO riverencas kaj eliras forpelaŭte la vilaĝanojn dirante, "Retiru vin, retiru vin!"

JUANMING: Mi konfesas, hodiaŭ estas ĝuste la tago de krizantemoj kaj pro tio mi volis havi festenon...Kia feliĉo sur feliĉo, ke vi alportis mian plej ŝatatan aĵon!

ĈU-JIN: Verdire, ankaŭ mi jam scias, ke hodiaŭ oni havas la feston de krizantemoj. Vi humiligas min, tro multe ĝojante pro tia modesta donaco. *(Li kaŝe pririgardas la staton de la loĝejo.)*

JUANMING (*larmeme*): Vere mi estas feliĉa homo; mire estas, ke mi estas ĉiam favorata. Mi ĉiam sopiras al la ĉefurbo, kiam mi trinkas sakeon, kaj kiam mi sopiros al la ĉefurbo, tiam mi ĉiam sopiras al vi. Tio tamen ne signifas, ke mi rigardas vin mikse kun la sakeo.

ĈU-JIN (*ridetante*): Ankaŭ mi same. Kiam mi havas okazon trinki, kaj deziras havi koran amikon simpatian, tiam mi ĉiam rememoras vin. Kaj la tagojn, en kiuj mi ne konsciis, ke la nokto profundigas, parolante kun vi, kiu en bona humoro pro la sakeo recitas poemojn kun akompano de senkordharpo, sur la balkono de la oficiala loĝejo en malhela vespero de printempo, kiam la branĉoj de la salikoj vidiĝis kiel fumo.

JUANMING: Nu, ni do trinku el via donaco por nia sano. *(Li ordonas al EDZINO per okulo.)* Se mi ne havus unusolan amikon, kiu estis vi, mi ne povus resti tie tiel longe.

ĈU-JIN (*por kaŝe esplori*): Mi pentas, ke mi faris eraron, invitante vin puraniman en tian trivialan mondon, kie regas tiaj sensencaj vantaj ceremoni-aĵoj kaj formalajoj, kaj per tio vin ĝenis.

JUANMING (*embarasite ridetas*): Ne. Se vi diras tion, mi iom embarasigas. Mi neniam estas tia malvulgara, puranima, malavida homo, kiel vi pensas. Mi ne malŝatas la mondecan gloron, kaj, precipe, mi estas tiel allogata de la belaj virinoj de la ĉefurbo. Se mi prezentus mian kaŝitan personecon, oni vidus, ke mi estas plenplena de trivialo kaj gloravida; mi

Lojang (洛陽): Nun Honang (河南), ĉefurbo de Ĉinujo en diversaj dinastioj.

restis ĉe la posteno allogate de diversaj aferoj Estas mensogo, ke mi diris, ke mi estis detenita de nur vi sola.

ĈU-JIN (*ridas*): Tio simple signifas, ke ankaŭ vi estas homo, ĉu ne?

JUANMING: Krome, mi ne ĉiam rifuzas formalizaĵojn kaj vantajn ceremoniojn. Estas nur, ke tiu ĉi obstina kolo, kiu kraskis senbride en la kamparo, tediĝas konformiĝi ĉiufoje al tiuj ceremonioj, sed ne estas tiel solena motivo nomata nobla koro aŭ pura animo.

EDZINO alportas du pokalojn. Ambaŭ estas iom difektitaj.

JUANMING: Ha ha ha. Ni jam flankenlasu la ceremonian parolon, kaj nun, antaŭ ĉio, unu pokalon! (*Li ĝoje malŝtopas la kruĉon.*) Ho, kiel longe mi ne havis ĝin!

ĈU-JIN (*prenante la kruĉon*): Ne, mi verŝos por vi, ĉar por vi ĝin mi alportis. (*Li verŝas la sakeon en la pokalon de JUANMING.*) Mi ne tiel amas sakeon, kiel vi, kaj cetere, se mi nur volas, mi ĉiam povas ĝin trinki.

JUANMING (*prenante la kruĉon*): Ne; se vi volas fari al mi ĝojon, estas se sence, ke vi ne trinkas. Malgraŭ bela sakeo, oni ne povus plengustumi, se sola.

Li transdonas la kruĉon al EDZINO, kiu verŝas el ĝi en la pokalon de ĈU-JIN.

ĈU-JIN (*akceptas*): Certe mi agis nedece. Tiam do, sinjorino, ankaŭ vi devas akcepti; se ne, mi miaflanke dirus, ke la sakeo estas malbongusta. Ha ha ha. Nu. (*Li tostas por la geedzoj kaj trinkas.*)

JUANMING: Ne. Ni ne havas pli da pokaloj. Mi permesos vin, edzino, leki la pokalon post mi. (*Li tostas kaj faras langbruon.*) Ho, belega sakeo! La aromo! (*Li donas sian pokalon al EDZINO.*) Provu unu pokalon. Ĝi tute diferencas de la kampara nerafinita sakeo.

EDZINO (*trinketas*): Ho, kiel bona ĝi estas! Mi eĉ du'as, ĉu ĝi vere estas sakeo.

JUANMING (*reprenas la pokalon*): Eĉ se vi laŭdas, mi ne plu donas. Ĝi estas mia tre kara akvo de vivo. Ho, jen mia malsano ien forpeliĝis.

ĈU-JIN (*verŝas en la pokalon de JUANMING*): Ĉu vi ne ekvolus enmeti viajn piedojn en la kotajon, kiu plenplene havas tiun akvon de vivo.

JUANMING (*rigardas la vizaĝon de ĈU-JIN, kun la pokalo en la mano*).

ĈU-JIN: Ĉu mi vin embarasas? (*Li ridas.*) Nu, verdire, mi venis kun tre embarasa misio.

JUANMING: Mi jam antaŭsentis tion. — La ordono do devus esti, ke vi kaptu min, ĉu ne?

24 (254) ĈU-JIN: Mi konfesas, ke vi trafas. Tamen, ĉar vi estas tia fiŝo, kia ne

povas esti kapta a per ordinaraj allogaĵoj, oni speciale aranĝis por vi postenon, kian liberan oni nenie aliloke trovas. Jam ne dirante pri mensogo, eĉ unu flatan vorteton vi ne bezonas eldiri.

JUANMING (*en plej bona humoro*): Ne diru tiamaniere. Ankaŭ mi povas diri komplimentojn, kaj foje mensogas. Mi ne estas tia absolute altspirita kaj puranima.

EDZINO: Vi vidas, ke li estas tre kompieza. (*Ŝi ridas.*)

JUANMING: Ha ha ha. Nu, kia posteno tio do estas?

ĈU-JIN: Por nomi, tio ne havas difinitan titolon. Se oni volus nepre nomi, oni povus nomi ĝin kortega poeto. Vi nur verku poemojn kaj de tempo al tempo manĝu bongustaĵojn ĉe la festenoj de la kortego.

EDZINO: Ho, kia bona posteno!

ĈU-JIN: Kaj plie oni volas iom plialtigi la salajron ol antaŭe.

JUANMING: Al mi ŝajnas, ke la kondiĉoj estas tro favoraj.

ĈU-JIN: Jes, tro favoraj. Tial ankaŭ mi iom timas. La nomo estas bela, sed mi timas, ke oni certe elrevigos vin denove kaj donos al vi malagrablan impreson.

JUANMING: Hm.

ĈU JIN (*por esplori lin*): Tial mi rimarkigis, ke vi certe ne akceptos, ĉar vi forkuris jam unufoje de la oficeja vivo, kiu pli malpli postulas flatemon.

La geedzoj TAO restas silentaj.

ĈU-JIN: Krome, estante ĉi tie, mi plifirmigis mian konvinkon, ke nia espero re estas realigebla. Vi devas esti vere feliĉa, ĝuante la simplecan vivon de kamplaboristo trankvile paŝti ĉevalojn kaj plugi la teron en tia bela kaj grandioza kamparo. Kio povus movi vin el tiu ĉi feliĉo!

JUANMING: Ha ha ha. Estiĝas interese. Mi estas rigardata same kiel tiu pesimisto Ĉu-Juan.¹⁾ (*Li denove ridas laŭte.*) “Ĉiuj mondanoj malpuras, mi sola puras”,²⁾ ĉu ne? Sed oni devus konfuziĝi, ĉar ĉi tiu Ĉu-Juan estas eĉ pli malpura ol la mondanoj. Tamen, se mi estus tiel nobla kaj pura homo, ke mi pro tio malŝatus la mondon kaj evitus ĝin, tiam la afero estus alia. Sed miaflanke la afero estas tia, ke tio devenas de mia egoismo deziri des pli ĝui la ŝatatan vivon per vivado plaĉa al mi, kaj tial, kulturante la teron, tio estas nur imitaĵo, en kio mi havas amuzon, aliflanke kulturante la krizantemojn. Mi ne pensas, ke mi laboras.

1) Ĉu-Juan (屈原): Ministro de Ĉo (楚), antikva dinastio de Ĉinujo. Pro kalumnio li estis eksigita kaj ĉronigis sin en rivero postlasante poemon.

2) Verso el poemo de Ĉu-Juan post la eksigo, “Vortoj de fiŝisto.” (漁夫之辭)

ĈU-JIN: Ĉu vere? Mi tamen aŭdis, ke vi difektis vian korpon per troa laboro. Mi tamen estas trankvila, vidante vin bonfarta. Mia misio estas jam plenumita simple per tio, ke mi venis ĉi tien.

JUANMING: Mi mem ofte iom embarasiĝas je mia egoisma kaj malagema karaktero.

ĈU-JIN (*ridas*): Sed mi respektas vin, ankaŭ pro, ke vi estas egoisma. — Ha, belaj nuboj ape is!

JUANMING (*leviĝas kaj rigardas la ĉielon*): Ho, tiu ŝvebanta malpezeco! Konfucio* diris, ke la stato esti riĉa kaj altranga en maljusa eco estas kvazaŭ ŝvebanta nubo. Mi tamen ĉiam pensas, se mi nur povus fariĝi tiel malpezega, kiel tiuj ŝvebantaj nuboj kaj solviĝi en la grandan malplenecon!

Aŭdiĝas, ke sovaĝanseroj pasas kun laŭtaj krioj.

ĈU-JIN: Ho, la sovaĝanseroj flugas. Ili devus reiri suten. Nu, mi estas homo atendata de la ofico. Kvankam mia koro estas detenata de vi, kiun mi ne longe vidis, mi tamen jam devas aliaŭi vin.

JUANMING: Kio? Ĉu vi jam foriras?

ĈU-JIN: Pardonu min. Ankaŭ tio estas mia mondeca devo kaj nenio helpas.

JUANMING (*momenton enpensiĝas*): Ĉu ne permesite reteni vin?

EDZINO: Ho, sed tiam... ni traktis vin tro senkompleze.

ĈU-JIN: Nur kompatu min, sinjorino, ĉar estas mia tasko doni la saman impreson al ĉiuj, kiujn mi vidas, kaj rapide ĉirkaŭkuri de loko al loko. (*Li eligas el la sino ion envolvitan en papero.*) Jen, sinjoro, oni konfidis al mi tiun arĝenton por via vojaĝkosto, en la okazo, se vi akceptas denove la vokon de la kortego. (*JUANMING kaj EDZINO rigardas inter si kun la mieno de sopiro.*) Mi ne volas devigi vin, kvankam mi donas ĝin al vi. (*Li ŝovas sin al JUANMING, kiu unu paŝon sin retiras.*) Se vi volus viziti la ĉefurbon eĉ nur por rigardi la staton, tiam kompreneble, estas jam sufiĉe. Eĉ se vi fortrinkos ĝin ĉi tie, la imperiestro kaj la aliaj, kiuj bone komprenas vian strangan karakteron, ridos naive kaj neniuj riproĉos vin.

JUANMING: Mi tamen ne povas dorlotiĝi plu, profitante, ke oni pensas pri mi tiele.

ĈU-JIN: Mi povus raporti, ke vi estis malsana, kaj tial mi lasis la monon kiel konsolajon. Akceptu ĝin senĝene. Ĉiuokaze ĝi estas libera. Vi ne havos ĝenon pro tio. (*Devige li metas ĝin en la manon de JUANMING.*)

(256) Konfucio (孔子) (551–478 aK.): Etikisto, konata kiel la plej granda saĝulo de Ĉinujo.

JUANMING: Do mi dorlotiĝas al via amikeco kaj akceptas ĝin. Kvankam mia koro sentas premon, tamen ĉiuokaze mi povas per ĝi saviĝi.

ĈU-JIN: Volu akcepti, kaj ne sentu korpremon.

JUANMING: Se mi estus Ĉu-Juan, mi kuraĝus forĵeti ĝin, nomante ĝin malpura jugo, ha ha ha.

ĈU-JIN: Tio ne indas por forĵeti kaj priofendiĝi. Do ĝis iama revido. Fartu bone, gesinjoroj.

JUANMING: Ankaŭ al vi bonsanon. Adiaŭ.

La tri riverencas inter si. Geedzoj TAO iras akompane al ĈU-JIN. JUANMING sola baldaŭ revenas, gape enpensiĝas. Li eksidas sur la verandon. Akra plorkio de la infano.

EDZINO: Jen, momenton! Mi tuj venos. (*Dirante tion, ŝi kure revenas kaj volas eniri en la loĝejon.*)

JUANMING (*leviĝas*): Haltigu la boaton. Dru, ke oni atendu min. Mi...iros al la ĉefurbo.

EDZINO: He? (*Ŝi surpriziĝas.*) Al la ĉefurbo?

JUANMING: Jes. Al mi ŝajnas, ke mi ne devas senfare resti ĉi tie. — Mi decidas iri.

EDZINO: Ho; vi tamen ne bezonas nepre iri al la ne ŝatata...

JUANMING: Ne, mi ne iras devigite. Ĉie ajn oni trovas utopion. Kaj krome, se mi servos por kelka tempo, la vivo de ni ĉiuj povos esti denove faci'a. Mia egoismo estis tro granda.

EDZINO (*unuflanke plena de ĝojo*): Tio ne estas vero. Estas nur, ke via korpo ne taŭgas por tia pena laboro.

DUA KAMPARANO (*denove aperas*): Tio estas bela ideo, efektive. La vila'anoj, ĉiuj diras. Ke estas tute domaĝe, lasi vin labori en la kampo; tio estas same kiel kaŝi trezoron en la monto.

JUANMING: Vi devus esti soleca. Sed eltenu, mi petas. Estos por kelka tempo. Mi baldaŭ revenos, kiam mi akiros monon.

EDZINO: Por vi, mi kiom ajn eltenos, sed tamen...

JUANMING (*leviĝas*): Haltigu la boaton. Diru, ke mi iros! (*Al DUA KAMPARANO*) Mi petas vian afablan zorgon dum mia foresto. (*Li rapideme eniras en la internon.*)

DUA KAMPARANO: Estu trankvila. (*Al EDZINO*) Mi iros haltigi la boaton.

DUA KAMPARANO kure malaperas. EDZINO, kiu unue aspektis ĝoje, nun malgaje kaj malstreĉe sidiĝas sur la verandon. Voĉo de DUA KAMPARANO, "Hej, atendu! Boato!"

小坂 狷二

諺集解義

6

87.—(a) Ne ĉio brilanta estas diamanto. (b) Ŝajno trompas. (c) Ne ĉio utilas, kio brilas.

(a) 光るもの必ずしもすべてがダイヤモンドに非ず。(b) 外見は人をだます〔人は見かけによらぬもの；見かけ倒し〕。(c) 光るもの必ずしもすべてが人に利を與えるものとは限らぬ。

【註】 (a) Ne ĉio すべてが必ずしも……に非ず(であるとは限らぬ)：28【註】(a) 参照。(b) Ŝajni (何々)の様に見える，(何々)らしい；ŝajno 見かけ。(c) utili=esti utila (al iu) 役立つ，爲になる，甲斐(益)がある。

88.—(a) Li estas preskaŭ mia frato：nepo de kuzo de onklo de konato. (b) Parenco per Adamo.

(a) 謂わば兄貴みたいなものさ：識り合いの叔父貴のいとこの孫になるんだから。(b) アダムを介して親戚(とは赤の他人だ)。

【註】 (b) Adamo は人間の先祖。誰でも祖先をさかのぼれば Adamo を経て親類になるわけ。遠縁も遠縁，赤の他人。

89.—(a) Pli bona amiko intima, ol parenco malproksima. (b) Pli bona apude najbaro, ol frato post arbaro.

(a) 遠い親類よりも親しい友(の方がましだ)。(b) 森の向う(遠い所)に居る

兄よりもそばに居る近所の他人の方がいい。

【註】 (a) parenco 親族(英語の parents と取り違えるな；『両親』は gepatroj)。 (b) najbaro 隣人。(a, b) 共に Pli bona estas と補つて解せよ。

90.—(a) Pli valoras propria ĉemizo, ol fremda plena valizo. (b) Ĉiu por si mem estas la plej kara. (c) Pli kara kapo ol ĉapo. (ĉ) Pronomoj «mia», «min» kaj «mi» en mondo reĝas ĉiam tri.

(a) 他人のつめ込んだ一と梱(の衣裳)よりも自分のシャツの方がよい。(b) 誰でも自分自身にとつて一番大切(一番かわいいのは我が身)。(c) 頭巾よりも我が頭(が大切)。(ĉ) 代名詞『おれの(もの)，おれを，おれ』は世を支配する三頭目(世の中は何事でも先ず『おれ』が先に立つ)。

【註】 valizo (衣裳などをつめて手に携行する)旅行鞆，スーツケース(ホルトマントー)；kofro (手携げ形でない，大型の衣裳をつめる)トランク，キャビントランク；paperujo (書類をいれる)手携カバン，ホルトフオリオ。(b, c) kara 高價な，貴重な(西洋人は勘定高いので高價なものは)大切な，大事な(ものであり，それは又自分にとつて)親愛な，かわいい(ものと云う感情になる)。

91.—(a) Vidas okulo, sed mano ne trafas. (b) Proksima kubu'o, sed ne por la buŝo.

(a) 目には見えるが手にはとどかぬ。(b) 手近かにはあるが(肘には近いが)口には入らぬもの(自分のものには出来ぬ『おあすけ』の形)。

92.—(a) Pri la lupo rakonto, kaj la

lupo renkonte. (b) Ne pentru diablön sur la muro.

(a) 狼の噂をすれば (狼に就て物語をすれば) 狼に出遇う。 (b) 壁の上へ悪魔の繪など書くな (本當に悪魔が出て来るぞ) [噂をすれば影]。

【註】 (a) Renkonte 行き遇いに、人を出迎える様にその人に近づく: Mi eniris la ĉambron, kaj li kun rideto venis al mi renkonte. 部屋に入ると彼は微笑を浮べて私を出迎えて近よつて來た。

93.—Preĝejo proksima, sed D'io malproksima.

教會は近けれど神は遠し (寺への道とお淨土への道はちがう)。

94.—Apud propra domo ŝtelisto ne ŝtelas.

自分の家の近所で盜人は盜みに入らぬ。

95.—() Li havas la kapon sur ĝusta loko. (b) Naivuloj jam ne ekzistas.

(a) 彼は頭を頭のあるべき所へちやんとつけている (抜目はない, 怨才はない, へまはやらぬ, だまされぬ)。 (b) (人にだまされる様な) お人好しはもう居らんよ。

【註】 (a) loko に附く前置詞は普通の場合には en: La pentraĵo defalis en kelkaj lokoj. ペンキが處々剥げている; あるべき處に片付いている (置いてある) 意には sur: Ĉio staris sur ĝia loko. それぞれ元の場所にそのまゝ置いてあつた。Kapo 頭, 頭腦, (即ち頭は) 理智 (の宿る所); koro 心臓, (喜怒に際しては心臓がドキつくので古人は心臓は) 情 (の宿る所と考えた, 即ち人の) 心 (の意となる), galo 膽汁, (人が怒るとニガつぽく感ずるのは hepato を刺激して膽汁を分泌するのだと考

えた): perdi la kopon 理性を失う, 氣がふれる, perdi la koron 落膽する, 失戀する; inciti al iu la galon 人を怒らす, 癪にさわらす。Ĝusta (場違いでない) 正當な, 正しい, (當然) さあるべき, (正に然るべき) 丁度の。 (b) Naiva (人ずれがしていない) うぶな, (赤子の心の様な) 邪氣のない, (だまされてもそのまゝ信じる様な) 氣の純な, (飾り氣のない, 恥しい事も知らぬ) 素樸な。

96.—(a) Ne estas piediranto kolego al rajdanto. (b) Malriĉulo parencojn ne havas. (c) Riĉulo kiel fajro proksime bruligas, malproksime ne varmigas. (ĉ) Por pot' argila poto fera estas najbaro danĝera.

(a) 徒歩者は騎馬者の道連れにならぬ [牛は牛連れ馬は馬連れ]。 (b) 貧乏人には親類がない (親類も他人顔)。 (c) 金持は火の如く近くに居る者を焦し, 遠方に居る者はあたゝめてくれぬ (身近の者は美ませ, 遠い者には恩澤を與えない)。 (ĉ) 粘土製の壺にとつて鐵壺は危険な道連れ。

【註】 (a) Pied'ir'anto 徒歩者; iri piede 歩いてゆく。 (ĉ) エソツプ物語にある話: 川を土の壺と鐵の壺とが流れてゆく。鐵壺が曰く『同じに流れてゆくんだから道連れになりましょう』。土壺曰く『滅相もない。お前にさわられたらこちらはわれて了う。めつたに近寄つて下さるな』と。Argilo 粘土, 陶土; tero (普通の) 土, koto (往來の雨後の水のまじつた) 泥, 泥濘; ŝlimo 川や池の底などの) 沼土, 泥土。

97.—Riĉa zorgas pri ĉampano, malriĉa pri pano.

金持が心をつかうのはシャムパン (のよしあし), 貧乏人の苦勞はパン。

98.—(a) Riĉeco estas frato de fierco. (b) Riĉulo havas kornojn, mal-

riĉulo dornojn. (c) Riĉulo veturas, ma riĉulo kuras.

(a) 富貴は慢氣の兄弟。(b) 金持には角があり, 貧乏には荊がある。(c) 金持は車でかけり, 貧乏人は足でかける。

99.—(a) Kiu ne akiras, kiam li povas, tiu poste deziras, sed jam ne retrovas. (b) Tro elektema ricevas nenion. (c) Pli bona—estas malamiko de bona. (ĉ) Ŝiru rozojn en somero, ĉar en vintro ili ne estos.

(a) 手に入れ得る時に手に入れない人は後になつて欲しくなつてももう再び見出せない。(b) あまりより好みをする者は何も得られぬ。(c) (善いものの味方悪い者は嫌いなどとより好みしているよりは) 善いもののかたきになる——それでもその方がましだ。(ĉ) 夏の内にばらの花を摘みなさい, 冬になればもうなくなるから〔若い時は二度ない〕。

100.—(a) Tro rapida riĉiĝo diablون ĝojigas. (b) For konscienco, venos potenco. (c) Fasto kaj preĝo riĉecon ne donas.

(a) あまり金の出来方が早いと悪魔を喜ばす(悪魔につけいらせて禍がある)。(b) 良心などすてゝしまえ, そうすれば出世する(威力が来る)。(c) 斷食の苦行やお禱り(眞面目だけ)では金持にはなれぬ。

【註】 (b) For estu konscienco, kaj... と補つて解せよ。

101.—(a) Oni vivas ne kun mono, sed kun persono. (b) Granda doto kaj oro, sed mankas la koro. (c)

Doto koron ne varmigas.

(a) 吾人が共に生活しているのはお金とではなく, 人とである。(b) 持參金と黄金とは多けれど, 心(情)を缺く。(c) 持參金は心を温めぬ。

102.—(a) Riĉeco sen gvido kiel ĉevalo sen brido. (b) Pli bona homo sen mono, ol mono sen homo.

(a) 統御なき富貴は頭絡なき馬の如し(行く處を知らず)。(b) 金なき人の方が人なき金よりもましである。

【註】 (a) brido 馬を御するため eabuŝaĵo (轡) や kondukiloj (手綱) を馬の頭に取り付ける limenaro (革紐具), 馬勒, 頭絡。お金も人を得なければ駄目の意。

103.—(a) Riĉa preparo, sed povo avara. (b) Kion mi povas, tion mi elŝovas. (c) Nur pano kun fromaĝo, sed afabla vizaĝo.

(a) 仕度は堂々たるもの, ところが實行力はケチ臭い微々たるもの。(b) 私に出来るだけのものを差し出します(貧弱乍ら出来るだけの御馳走, 應分の寄附を致しますなど)。(c) (出す御馳走は) チーズ付のパンだけ, しかしせめてもの愛相のよいニコニコ顔。

104.—(a) Bovidon mi atendis, infanon Dio sendis. (b) Al malriĉulo infanoj ne mankas.

(a) 牛の子が生まれるのを期待していたのに神が授け賜うたは赤ン坊。(b) 貧乏人に子供は不足せぬ〔律義者の子澤山〕。

【註】 (a) atendi (人や物の来るのを) 待っている, (何々があれかしと) 待ちもうける, 期待する。(b) Manki (物が) 缺けている(無い), (完全までにはなお少し) 足らぬ; manko

缺乏, (物が全く) 無いこと, 不足, (人物として缺けている) 缺點 (=malfortaĵo).

105.—(a) Vilaĝano kreditas, vilaĝestro pruntas. (b) Festeno kaj ĉaso kaj da ŝuldoj amaso.

(a) 村人は(節儉して)貸金をすれば, 村長さんは(浪費で)借金をする。(b) 饗宴や狩獵と贅澤三昧そして借金の方は山(金廻のよい者が反つて借金)。

106.—(a) Al mono kaj forto humiligas la sorto. (b) Ju pli da havo, des pli da pravo.

(a) 金と力とには運命も頭を下げる。(b) 財と力とが多ければ多い程(御無理)御尤もが多くなる「金が物を云う」。

【註】 (b) Havo 財産 (hav'aĵo). 動詞 havi を名詞化した hav'o [造語形式 i-o, 即ち ad-o] は元來『持つて居ること』なる hav と云う動作を示す名詞の意であるが, 名詞語尾 'o 中には抽象具象の兩意味を含み得る, 即ち 'o = ado, eco, aĵo, ulo であるから havo が hav-(aĵ)o 即ち havaĵo (=aĵo, kiun oni havas, aĵo havata) 『資産』の意として甚だ屢々用いられる。類例: Li estas nia belo. 彼は吾等が美(しのお方)である。bel'o は本來は造語形式 a-o, 即ち ec-o で『美しさ』の意であるが, 茲には bel'o = bel-(ul)o = belulo 『美しき人』なる具象名詞の意に用いられているのである。

107.—(a) Kiu riĉiĝas, tiu fieriĝas. (b) Sklavo kun forta mano estas plej granda tirano. (c) Se malriĉulo sukcesas, li ĉiujn forgesas. (ĉ) Al sklavo mon' ne estas savo — li ĉiam restas sklavo.

(a) 金持になれば傲慢になる。(b) 腕節の強い奴僕は最もひどい暴君である。(c) 貧乏人が成功すると誰をもふりむき

もせぬ様になる(皆を忘れる)。(ĉ) 奴隷には金をやつても救助にならぬ——矢張り(性根は)奴隷のまゝで居る(奴隷根性はとれぬ)。「持ちつけなかつた者は金が出来てもお里はとれぬ」。

108.—Trio plaĉas al D'o.

三は神のお氣に召す數 (『三は縁起のよい數』だから三人で分けようなど云う場合)。

109.—Se amas Dio, prosperas ĉio.

神が愛して下されば(運さえよくば)萬事はうまくゆく。

110.—(a) Dio batas, Dio kompatas.

(b) Songo teruras, songo forkuras.

(a) 神は打擲し賜うが, また神は憐み賜う(悪い事も起るがまたあとで善い事がある)。(b) 夢は人を怖れおののかしむるが, 然し退散して了う(あとには何も残らぬ)。「災難は一時の夢」。

111.—Ankoraŭ Dio ne dormas.

神は未だい寝給わず(神様は目をあけてい給うから必ずや應報がある)。

La unua maŝinskribita manuskripto jam en 1874

Ja nature, iu manuskripto devis esti la unua skribita per maŝino. Sed estas malmulte konate ke tio okazis jam en la jaro 1874. Kaj ankoraŭ pli malmulte konate estas ke la unua verkisto, kiu liveris maŝinskribitan manuskripton al sia eldonisto, estis la genia amerika bonhumora verkisto Mark Twain. Tiu manuskripto estis "La aventuroj de Tom Sawyer", kiu en la jaro 1874 estis finita.

倉地治夫

アメリカで遇った人々

ニューヨーク市

英人ハドソン氏が、初めてハドソン河に辿り着いたのが今から330年前の1609年。ニューヨーク市の中央部マンハッタン島の人口が、1626年には200人であつたと案内書に記してある。現在では人口750萬を擁する世界第1の大都會。あらゆる近代文明の粹を集め、全世界の各人種を包含し、さながら世界の縮圖の感がある。この地で發行されている定期刊行物を言語別にすれば、百數十種に上るとゆうことである。

此地のエスペラント團體には Esp. Societo de Nov Jorko があり、毎月1回會合をしている。Washington市の失敗もあるので、豫め S. o Louis Dormont に手紙を出して連絡しておいた。同氏は北米エスペラント會の Vic-prezidanto をやっている小學校の校長さんである。私が第2回目にニューヨークを訪ねたのは7月16日。丁度暑中休暇で殆どのエスペランティストが避暑に出かけ、會合も中止している時期であつた。Dormont 氏も又

Brant Lake 湖畔に避暑して留守。氏の紹介を得て F. ino Ruth S. Davis を訪ねた。嬢は女醫で見た處 32-3 の老嬢。16丁目の下町のアパートに數室を借り受けて、父と2人住居。訪ねた時には數名の患者が待つていた。一昨年の萬國大會にも出席したことがあると言うほどで會話に中々達者であつた。書架にはエスペラントの藏書が2-300冊位見え、中には名古屋の白木君の著書や下村君のもの等が目止つた。然しながら、あまり研究的な書は見當らなかつた。四方山の話に2時間ばかりもお邪魔し御馳走にもなつて別れた。その後ニューヨークへは2回訪問したが、何時も時間の餘裕がなくて再會の機會を得なかつた。

國際補助語協會 (IALA)

12月、第4回目のニューヨーク滞在中に、1日寸暇を得たので、レキシントン通り420番地のIALAを訪問した。

IALAは人工の國際補助語を世界に承認させて言語の國際的繁雜を取除くことを目的とした團體で、1924年金持の夫人モーリスによつて設立されたものである。この會の活動や内容の詳細は昭和12年(1937)7月號の La Revuo Orienta 誌(第2-7頁)に委しく紹介されているので、御希望の讀者にはそれを御覽願ひ、こゝには省略することにしよう。

24階のあまり廣くもない一室がその本部。10坪もあつたろうか。Master of Arts の肩書を持つ祕書の F. ino Mary Bray とそれを助けている S. ino Ruth Griggs の二人が机に向合せ、兩側の壁にはエスペラントを始め色

[IALAの事務所で] 向つて左から：——筆者、S. ino R. Griggs, F. ino M. Bray.



んな国際語の文献が収められた本棚が置かれ、他には鋼鉄製のキャビネットが二つばかりと、来客用の椅子が2-3脚、タイプライターが2臺——之が重なる什器の全部である。ニューヨークの此の本部の他に、英國のリヴァプール大學にも事務所を持ち、エスペランティストとしても有名な言語學者 Collinson 教授が中心となつて活動し、パリ大學の教授 J. Vendryes 氏、スキスのベルン大學 A. Debrunner 氏等、歐米各地大學の學者達を委員に集めている大がかりな團體の本部の事務所とは、どうしても見えない。

F-ino Mary Bray はエスペラントは話せないが、S-ino Ruth Griggs は少し話せる。突然の訪問ではあつたが、2 人共極めて愛想よくもてなしてくれた。英語とエスペラントを入れ交せて 2 時間も話した。書棚には La Revuo Orienta を始め、日本で発行されたエス文、日本文の書籍も十數冊ばかり見受けられた。Occidental を始め、色んな国際語の文献を収めたキャビネットも中をあけて見せてくれたが、そんなに驚くほどのコレクションではなさそうに見えた。

協會の仕事としては、今日までに相當の業績を挙げ、出版物も數々あるが、その内でも會員の 1 人である H. N. Shenton 教授によつて 1934 年に發表された “Cosmopolitan Conversation” は有名である。此の書はニューヨークの Columbia University Press で印刷され、800 頁を越える大冊。年々各國で開催される國際會議における言語問題を論じ、エスペラントの優秀性を説いたものである。丁度協會に餘分が 1 冊あつたので私に寄贈してくれた。日本にも 2-3 冊は来て居ると聞いている。

私も今後の連絡の爲に、會員として申込をしておいた。

F-ino Doris Tappan

IALA で話し込んでいるうちに、近くに住んでいる F-ino Doris Tappan に會つてみないかと言う。少し時間もあるので會うことに決め、S-ino Griggs が電話をかけてくれた。丁度お昼すぎこの協會事務所で落合つて附近



筆者と F-ino D. Tappan

の Restoracio で食事を共にしながら 2 時間ばかり話し合つた。

歴史の研究に興味を持ち、コロンビア大學のマスターオブアーツの肩書がある。エスペラントは數年前から始めたと言うことだが會話は仲々達者。Cseh-instruistino として活躍している 22-3 かと思われるお嬢さん。叔父さんの S-ro G. A. Connor 氏は日本へも 2 度來朝したことのあるエスペランティストで、大變な親日家である。現在では、IEL (Internacia Esp.-Ligo) の Delegito となつている。學會の久保君や、大阪の池川氏、神戸の豊田嬢とも面識があるよしだが、不幸にして私は同氏には遇う機會を持たなかつた。最近同氏からの來信によれば、此の 7 月頃、Tappan 嬢同伴で日本訪問を計畫されている様だ。實現する事を祈つている。

F-ino Tappan との會見で経験したことだが、數ヶ月間英語で生活していて、久し振りにエスペラントを話していると、知らず知らず “Yes” “No” が口をついて出て來るのには閉口した。込みいつた話は兎に角、日常の會話で頻繁に使い馴れた簡単な受け答えの言葉、例えば “That’s right.” “Is that so?” “That’s good.” “Sure.” “Certainly” “Beg pardon” 等々がすぐ頭に浮んで來る。“Bone.” “Ĉu vere?” “Vere” “Ĝuste” “Sendube” “Povas esti” 等々エスペラントの調子が出て英語が頭から抜けるまでには



Itala restoracio の前で S-ro A. S. Vinzent

2-30分も経った。之は自分の頭の悪さからではあるが、會話の學習上教授上に、何物かを暗示していると思うので、敢えて恥さらしを書いておこう。

サンフランシスコ市

私の旅行の順序から言えば、こゝでロサンゼルスのお話をしたいのですが、之は次號に廻し、サンフランシスコに飛びませう。

仕事を終つて歸朝の途、11月20日サンフランシスコに着いて見ると、豫定の鎌倉丸は23日まで出帆が延期されている。少し時間の餘裕が出来たので、カリフォルニア銀行に勤めている S-ro A. S. Vinzent に電話して見た。早速ホテルまでやつて来てくれた。

氏は大の日本蟲眞で、日本の同志とも文通している。支那人街を散歩しながら、今度の事變でなぜ日本はもつと宣傳をしないのかと口惜しがつていた。實際支那のエスペランティスト達は仲々宣傳上手で、物資不足で紙の不

自由もあるのに拘らず、重慶に本部を置いて、エスペラントによる對外宣傳を盛にやつている様である。アメリカ各地の同志へもエス文のパンフレットをバラ撒いている様である。

S-ro Vinzent はエスペラントを通じて日本人に接觸をし、日本を充分理解しているのであるが、こうした我々日本人の友が一人でも多く出来ることは嬉しいことである。

粉のチーズを振りかけたイタリアンパゲッチに舌鼓を打ち、葡萄酒の御馳走になつて別れた。

僅かの時間ではあつたが、親しみ易い應待振りや、日本人に對する溢れる様な好意は、忘れられないものの一つである。

宮崎大會奇聞

觀光第2班は河野老の計いにて萬全の貴賓待遇。都農神社にては特に修祓の土神殿に進めば、神職恭々しく神酒を捧げ先ず野原老に與える。排酒家の野原先生三拜の後、卒然として之を光る頭上に傾けた。續く面々、古典の大家の儀禮に疑いなしとて次々に酒のバプテスマを受けて草深き日向の神職をして呆然たらしめることしばし。(巢山生)

全エス文 **TEMPO** 月刊雜誌

第7年 第63號

内 容

印度の抗英運動

支那新中央政府の成立

半開の美

金を塗つた鐵砲

河 童

ふるさと

エスペラント界だより

新刊紹介

柴 山 慶

バ ト ラ ア

芥川龍之介作

野 島 彬譯

島 崎 藤 村作

川 崎 直 一譯

懸賞論文募集

Le Coin Espérantiste

定價 1年 1.20 (送料共)

發行所 國際時事新聞社

京都市寺町夷川

電 2555 振替大阪 23404
41036

エスペラント學力檢定 高等試験問題

・昭和15年4月29日宮崎市で施行・

エス文和譯

1. Li estas tre ekkolerema kaj ekscitiĝas ofte ĉe la plej malgranda bagatelo; tamen li estas tre pardonema, li ne portas longe la koleron kaj li tute ne estas vengema.

2. Ĉiuj prepozicioj per si mem postulas ĉiam nur la nominativon. Se ni iam post prepozicio uzas la akuzativon, la akuzativo t.e. dependas ne de la prepozicio, sed de aliaj kaŭzoj. Ekzemple: por esprimi direkton, ni aldonas al la vorto la finon „n“; sekve ni diras „la birdo flugis en la ĉambron“, kaj la vorto „ĉambron“ staras tie ĉi en akuzativo ne ĉar la prepozicio „en“ tion ĉi postulas, sed nur ĉar ni volis esprimi direkton.

作文

あなたが初等講習を指導したとして、その終りにあたつてする演説(200語前後)の原稿を下の條件によつて書きなさい。

1) 演説の最初の文句はつぎのとほりであること(原稿には再記しないこと)。

Vi devas memori, ke kvankam vi ne oferris multajn monatojn al la lernado, tamen tiu lernado prenis multajn horojn. “Tempo estas mono”, diras la proverbo. Kaj ĉiu saĝa homo ne volas perdi tempon aŭ forĵeti

monon. Same pri viaj scioj en Esperanto: post la kurso ne ĵetu Esperanton en skatolon, kies enhavon vi poste forgesus. Ne! Uzu Esperanton en praktiko!

2) 演説には下記のうちのいくつか(あるひは全部でもよし)の點を含むこと

a) 組織の必要: 地方會, 聯盟, 全國代表團體, 國際的組織。今後の勉強に際してのこれら團體の與へる利益。b) エスペラント文獻。c) エスペラント雜誌。ĉ) 文通。

文法

1. a. Vi, kiun mi ofte vidis en miaj sonĝoj... vi atestu, kiu¹⁾ vin pli multe, pli kore, kaj pli sincere amas: ĉu mi, idea esperantisto, kiu²⁾ revis pri frateco inter ĉiuj viaj loĝantoj... aŭ ĉi tiuj personoj, kiuj deziras...

上文中 kiu¹⁾ と kiu²⁾ との差を簡単に云へ。

b. De la tempo, kiam la esperantistoj ĉesis paroli pri reformoj, komenciĝis por Esperanto periodo ĉiam pli kaj pli brianta.

1. 文の主語を云へ。

2. その主語の修飾語は何か。

次の句又は節はどう使はれてゐるか。簡単に説明せよ。

3. de la tempo

4. kiam...reformoj

5. pri reformoj

6. por Esperanto

2. 次文の空所に適當な前置詞をいれよ。

a. Li pas'is — mi sen saluto.

(彼は禮もせず傍を通つた)

b. Kio fariĝis — ŝi?

(彼女はどうしたのでせう)

c. La granda Niko devis kuri — (265) 35

LITERATURO 新刊紹介

KRESKAS

INFANOJ EN TORENTO, DUA PARTO,
de Stellan Engholm, eld. de Förlagsföre-
ningen Esperanto u.p.a., Stockholm, 1939;
13×20cm. 144p.

“Du knabetoj ludis en la sablo.” に始まる第1巻で成長を續けた Toronto の infanoj, Johano, Arne, Alda, Ajna が既に gejunuloj となつて社會に第1歩を踏みだす處からこの第2巻は始まる。異常な不況の底に沈む Toronto の町はやがて高まる世界不安に活潑となりその工業生産力を極度に發揮し始める。4人は夫々の職を得て新しい経験を積む。著

者はこの4人の眼を通して社會を觀察し、又4人の捲き起した事件——bano sen banvestojの各層に與えた反響によつてその各層を描き分けて見せる。

全巻は3篇に分れ各篇は1頁乃至數頁の rakontetoj から成り立ち物語は進行する。文章は Heroldo 誌の評する如く Fro sia facila, simpla kaj flua esprimmaniero la lingvo de S. Engholm povas esti nomata klasikstila. 印刷鮮明, 紙質亦上等。

Verkado en Esp. が著者の kromokupo である爲に第2巻の出版が第1巻のそれ(Budapest, 1934) より大變遅れたよし。併し Por mi la apero de nova originala verko ĉiam alportas ĝojon. Mi taksas ĝian signifon duobla kompare al tiu de tradukita verko. とは J. Baghy の言葉。何にしても優れた原作の現われる事は嬉しい事だ。それにつけて

なぜ日本國民はエスペラントをまなばなければならないか？

國語の力とその本質 (皇典講究所國學院講話集第10輯), 今泉忠義著, 皇典研究所(東京市澁谷區若木町9)發行, 昭和15年;

Ĉiuj siaj fortoj. (大ニコは一生懸命馳けねばならなかつた)

ĉ. La hirundo flugis — la riveron. (燕は川を飛超えた)

3. 次の語を用ひて簡単な文を作り, その文の譯も付せよ。

a. des pli b. po c. apenaŭ ĉ. do

4. 次の接頭, 接尾字を含む語を一個づつ與へ, その語の意味を附せよ。

a. dis- b. laŭ- c. -op- ĉ. -um-

常識

1. エスペラント必要の理由を五項目舉げていちいちに就いて簡単に説明を加へよ。

2. “Lingvaj Respondoj” とはどんな書物か。

13×19cm, 58p., 定價不明。

『國語を認識することの必要なこと前古未曾有と言つてよいやうな大切な時に方つて, まづ吾々の用ゐる或は聞く言葉にもつと敏感でなければならぬこと, その敏感になる爲の底力を養つて戴きたかつた爲に』はなされたものである。「國語の力」, 「ことだま」, 「國語の變遷」, 「國語研究史概要」などの項目にわたつてのべてある。議論のたてかたはおだやかであり, はなしぶりは, たれにもわかりやすい。ふだんは國語についてあまり研究していないようなひとびとへも, すすめたいパンフレットである。

さて, このパンフレットの第1章「國語の力」のなかに, つぎのような言葉がある。

『所謂國際語エスペラントは國籍のない言葉だけに, ある國を背景とした特色もないし國際語として最も理想的なものだといふ話だ。なるほどエスペラントはその用語からいつても, 獨佛英等の諸國語から選ばれてゐるだけに, 歐米人にはその簡単な人爲的に組織立てられた語尾變化を記憶すれば, 單語は自分等の使つてゐるものと縁の近いもので記憶するに容易であり, 語序は歐米語と何等相違することなく, 「あれは, である, 馬」なのであるから頗る簡便至極なものに感ぜられるで

事情止む得ぬとは云え斯る作品が容易に手に入らぬのは遺憾な事だ。1936年に本誌の試みたエス・ペラント西文学鑑賞とは異つた意味と同様の方法とで原文を多く引用した紹介をして見たらと思う。(袴田俊雄)

ESPERANTA FAMILIOLUDO, OES-Biblioteko N-ro 3, elpensita de T. Kuwahara, eld. de Osaka Esperanto-Societo, Osaka, 1940; 定價 40 錢, 送料 10 錢(學會取次)

これは好評の OES-Biblioteko の一つだ。初等文法は一通り覺えたが、さて會話には、一寸氣おくれするといった人達が、グルーボの輪講でも集つたときに、餘興に用いたら、きつと良い。子供が遊ぶ「家族合せ」と變りはない。

先日、學會の例會で、佐々城先生がお休み

あらう。併し、わが國語のやうな語序を異にし語尾變化の少い國語を使用する人々に取つては、歐米語を學ぶと殆ど何の變りもない勞力を要するのである。歐米語を學ぶならば英獨佛の少くも國籍を有する國語を選ぶことをまづ第一にすべきであらうと私は考へる。』

これだけの引用文では、『國籍を有する國語を選べ』とゆう理由がわかりかねるように見えるが、それは、『言葉には歴史がある。永い年月に亘つて生々發展した歴史がある』と、ほかのところののべている精神からかんがえて『國籍を有する國語』は、そのせなかに、文化と傳統とをになつてゐるからである、とゆう理からであるとおもわれる。

これは、それ自身では、まことにもつともな議論であつて、おうかれ、すくなかれ、これに似た言葉は、われわれの、しばしば、耳にするところである。

もちろん、うえにのべられたところは、簡単に、いいおよんだとゆう程度であつて、そのみじかさのゆえに、議論に「すき」があることはまぬがれがたいところである。

したがつて、わたくしは、ここに、その「すき」をついて、反駁しようとするのではない。

それよりも、われわれが、いままで、比較的になおざりにしていた問題について反省する機会を、これが與えたと考えて、むしろ、感謝しながら、反駁でなく——反駁とゆうならば、

で、丁度發案者の桑原さんが見えられたので試みた。簡単な言葉ではすむが、全部 Esperanto で話す定めだ。同じ Familio の Karto が 5 枚揃つた時に、“Pardonon”と言つて前に置かなければならない。すると 10 點になる。僕は揃つた嬉しさについて忘れて、すっかり桑原さんに、持つて行かれた。それに點を稼ぐには、たえず Frazoj を憶えてるのが肝心で、Mi estas ĉiam preta servi al mi, fraŭlino. なんて、口でもつていなければならない。だと言つて語學の力許りでは駄目らしい。Komencanto, 嚴さんは、もつとも良く出来る人だが、Bona trafanto で一番點を稼いだ。桑原さんは、さすがに「宗家」だけあつて、次點になつて、僕が 3 番だ。それに僕なんか考えてるうちに、皆んな仲々の警句を Esperanto で吐く。感心した。明日は Pikniko があるので持つて行く積だ。(三石清)

この 1 個のばあいに対してでなく、もつと普遍的な社會の先入觀念に對してである。——これを、それのてがかりにとりあげた議論をすすめたいとおもう。

そもそも、語學を學ぶことは、手段をうることであつて、それが目的でないことは、ゆうまでもないと、わかりきつたことを、まづのべておく必要がある。

この前提から、當然、みちびきだされるのは、エスペラントを學ぶことは、エスペラントをえらぶことではない、エスペラントを學ぶのは、エスペラントを學ぶことが、手段として、必要であるからでなければならない、とゆうことである。

こうかんがえるとき、エスペラントに、傳統的文化のある、ないとゆうことは、問題の中心からはずれてゆく。むしろ、その傳統的文化のないところに、エスペラントの要求される理由がひそむとはいへ。

そこで、問題の中心は、當然、われわれは、なにゆえに、エスペラントを學ばなければならないか、とゆう出發點にたちかえる。

エスペラントを學ぶ目的を、われわれは、3 個のたちばに、もとめることができる。

1. 個人 (individuo) として。
2. 國民 (nacio) として。
3. 人類 (homaro) として。

だが、議論の對象としては、わたくしは、エ

スペラントを学ぶ目的を、ほとんど、第2の立場からのものにかぎりたい。

なぜならば、第3の立場は、こんにち、まだ、はなはだ抽象的なものにすぎない。したがって、この立場にたつ議論には、たとえ、宗教的魅力はあるにしても、現実的な迫力にとぼしい。

第1の立場。エスペラント運動の生長の段階は、こんにち、なお、たれもが、個人的動機によつてのみ學ぶとゆう時代にたちいたつていないことを告白しなければならない。

個人的實利のためにのみ、外國語を學ぼうとするひとびとに、エスペラントを學べとすすめる機会、はなはだ、まれである。たとえば、交通により、世界の各國から研究の資料をあつめようとするひと、見知らぬ國國をめぐり見ようとするひと、このひとびとには、われわれは、エスペラントの學習と、エスペランティスト網の利用をすすめる。これが、どの國語にもまして、たやすく、しかも、もつとも効果的であることを知っているからである。フランス語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語、スウェーデン語など、いくつかの外國語を、できるだけ、みじかい期間に、十分學習しようとするひとがあれば、このひとにも、われわれは、まず、エスペラントをやれとすすめる。この「まわりみち」が、かえつて、たやすい「はやみち」であることを、われわれは、かたく信じるからである。しかし、これらのばあい、きわめて特殊のばあいであることを、われわれは知る。

よつて、われわれが、エスペラントを學ぶ理由、これを、いま、われわれは、主として、第2の立場——國民としての立場から考えなければならない。

このとき、われわれは、まず、われわれが、ひとつの國民であると同時に、われわれが、アジアそのものでありつつあることを考慮にいれておかなければならない。

こう考えるとき、われわれ日本國民は、エスペラントを、アジア解放のてだてのひとつとして利用する義務を感じる。このことゆえに、われわれは、イギリス帝國のアジア支配の象徴としての、かたよつた、必要以上のイギリス語尊重を、しばしば批判するのである。

また、國際語の學習は、これが國內語との對照をなすことによつて、學習者をして、自分の國語に對する認識を深めさせる。ここにわれわれは、この文章のはじめに挙げた、今

泉氏の言葉をおもひおこしたい。されば、このことのゆえにのみでも、すでに、今泉氏はエスペラント學習の必要を認められるべきである。もつとも、このひとをして、わたくしの言葉をうべなわすためには、もつとながい議論を必要とするであろうことはもちろんである。ここにのべたことは、もつとも簡単な序論にすぎないことをことわつて、よりくわしい、そして具體的な議論は、これを、別の機會へゆずらなければならない。

なお、エスペラントがやさしい、むづかしいとゆう問題は、國際語の學習が必要かどうかとゆう問題の解決ののちに、はじめて、ほかの國際語候補者とのあいだにおこる問題であつて、あれ、これの國語と、そのやさしさをくらべることは、論理的には矛盾しているが、それが、日本人にとつても、ほかの、いずれの國語よりもはるかにやさしいことは、あまりにあきらかな事實である。(三宅史平)



ラテン語手ホドキ (附ギリシャ語、フランス語、エスペラント語手ホドキ): 主として醫學用、淺田一著、11½×18 cm. 288 p. 克誠堂。1939, 定價 2 圓。

我等の同志淺田先生が醫學用語としてのラテン語、ギリシャ語の簡単な文法、合成語の組立てかたを説かれたもので、最後にフランス語、エスペラントがちよつとついている。素人の用いる Esp の單語でもラテン語、ギリシャ語の知識があると覚え易くもあるし、親しみもよけいにわく、例: mikrobo 微生物の mikro は mikroskopo ケンビ鏡の小, b は biologio 生物學などの生物など。Esp の Neologismo は英語、フランス語、ドイツ語その他近代語の形ではいるのであるが、それは實はラテン語、ギリシャ語の語根の組合せによる新造語のこともかなり多い、とくに學術語においてはそうである。(日本では世界の醫學語はドイツ語と思つて人が多いが、そのドイツ語の術語の重要な大部分はラテン語、ギリシャ語 なんである。) だいたい Esp の vorttrezoro の大部分そのものが語原的にはラテン語、ギリシャ語である以上 Esp の單語を深く研究しようとする人には英語、フランス語、ドイツ語などの近代語の知識よりもむしろラテン語、ギリシャ語の知識のほうがはるかに必要である。淺田先生の新著は醫學生用ではあるが一般人の學習にも興味をもつて讀まれ得るものである。(川崎直一)

MANĈOUKŬO-SEKCIO

El Manĝuraj Legendoj

Origino de Ŝi-Mjao en Liĉjatun

Blanka serpento estas adorata inter manĉoukŭa popolo kiel "Dio de Blanka Drako." Rakontoj temantaj pri blanka serpento ne estas maloftaj. Unu el ili estas legendo pri Ŝi-Mjao en Liĉjatun proksima al Dairen.

* * *

En tre malproksima tempo, viro el Ŝantung, kiu drivis dum longa tempo, atingis la bordon apud Liĉjatun.

La viro, kiu post longa suferado fine trovis sin denove sur la tero, estis pro ĝojo tute ekster si kaj nur paŝis sencele. Sed baldaŭ li subite sentis sin lacega kaj malsata kaj perdis forton fari eĉ unu paŝon plu. Li kusiĝis tie sur la herbejon kaj baldaŭ falis en profundan dormon.

Kiom da horoj pasis, li ne sciis...Kiam li vekigis el dormo, li trovis antaŭ si sovaĝan tigron preta ataki lin kun larĝe malfermita faŭko.

Konsternigis la viro. Sed por forkuri liaj membroj estis tro lacaj kaj por kontraŭbatali mankis armilo kaj forto. Estis nenia rimedo ol nur senhelpe tremi antaŭ la furiozanta besto. En la sekvanta momento la tigro ĵetis sin al li. "Helpu!" kun la lasta krio li perdis la konscion.

Kiam la viro rekonsciiĝis post kelka tempo, li vidis neatenditan scenon. La terura besto senmove kuŝis teren firme volvita de granda blanka serpento ĉirkaŭ la tuta korpo.

La viro ĵetis sin sur la teron kaj nur dankis la blankan serpenton, kiu savis lin el la danĝero de morto.

La viro konstruis maŭzoleon por diigi la blankan serpenton kaj loĝis tie dum sia tuta vivo zorgante la maŭzoleon.

Tio ĉi estas la origino de Ŝi-Mjao, kredata de la indiĝenaj loĝantoj; ili kredas, ke ankaŭ nun en la maŭzoleo vivas du blankaj serpentoj.

Origino de Njan-njan-Mjao ĉe Miĉenŝan

Njan-njan-Mjao estas maŭzoleo apoteozinta Diinon Njan-njan, kiu laŭ popo'a kredo patronas pri edziĝo kaj naskado.

La Diino estas vaste adorata de popolamaso. Festo de Njan-njan-Mjao (269) 39

okazas en la 18-a de aprilo laŭ la luna kalendaro ĉiujare. Tiam la maŭzoleo estas amase vizitata de adorantoj kaj prezentiĝas vere prospera kaj vivoplena festo.

En Manĉoukŭo troviĝas multaj Njan-njan-Mjaoj diversloke, el kiuj tiu sur la monto Miĉenŝan apud Taŝiĉjao estas unu el la plej famaj. Sekvanta legendo rakontas pri ĝia origino.

* * *

Estis en malnova tempo. Junulo, kiu kondukis ĉaron ŝargitan per sakoj da salo de Jingkoŭ al Taŝiĉjao, survoje renkontis tri junulinojn kiuj estis ĉiuj tiel belaj, ke eĉ la plej belaj floroj hontus antaŭ ili. Ili paŝadis ŝajne tre lacaj. Kiam la junulo proksimiĝis, la tri junulinoj petis al li: "Ĉu vi ne bonvolus veturigi nin sur via veturilo?"

Tio estis tre ĝena por li, ĉar estis jam vespero kaj li devis tre rapidi al la hejmo. Pezo de tri homoj sufiĉe malhelpus veturadon. Do li rifuzis. Sed mizera aspekto de la junulinoj tuŝis lian kompatemon kaj fine li decidis akcepti la peton. Li ordigis la sakojn kaj aranĝis sidlokon sur la ĉaro. La junulinoj tre ĝojis kaj eksidis sur la veturilon. Kontraŭ lia antaŭzorgo, la veturado estis tute facila, kvazaŭ glitanta.

La veturilo iris serpentumantan vojon el ruĝa argilo, pasis herbejojn, kaj post longa irado atingis malsupron de la monto apud Taŝiĉjao.

Tiam la junulinoj diris: "Dank' al via afabla servo, ni atingis la celon. Koran dankon!"

Ili deĉariĝis kaj transdonis al li tri volvaĵojn de ŝtofo dirante: "Tio ĉi estas signo de nia dankemo, bonvolu akcepti."

Kaj la tri supreniris la monton kun tiel mirinda rapideco, ke homa paŝo ne povus akompani ilin. Atinginte la montosupron ili surgenuiĝis kaj komencis preĝi.

Tiam, jen rigardu, el iliaj korpoj ekaperis aŭreolo, kiu blindige lumigis la ĉirkaŭon. La junulo, kiu rigardadis ĉion de malsupre, kliniĝis teren kvazaŭ ekfrapita.

Ekaŭdiĝas solena muziko. La tri junulinoj nun supreniras al la ĉielo.

La junulo kuregis al la vilaĝo por sciigi la okazaĵon al la vilaĝanoj. Sed, kiam homoj venis por vidi la miraklon, jam la figuroj de la tri belaj junulinoj estis tute malaperintaj malproksimen en la ĉielon.

Poste la vilaĝanoj konstruis tri maŭzoleojn sur la loko, kie la junulinoj faris preĝon, kaj apoteozis tri Diinojn.

Trad. de M. YAMAGATA

LA REVUO ORIENTA

Junio 1940

Jaro XXI N-ro 6

ブラジルからメセージ

訪日文化見學團に托して

ブラジル・エスペラント聯盟は、訪日文化見學團の同志 João Baptista Dubieux 氏に托して、日本のエスペランティストにあてたメセージをおくつた。これは、4月24日夜、帝國ホテルで、外務省文化事業部の稲葉正凱子立會のもとに、學會三宅主事にわたされた。このメセージを、三宅主事は、大會へ携行し、

大會席上で紹介、これに對する返書を大會で作し、大會名譽會頭長谷川知事、名譽顧問根井市長はじめ、參加者全員の署名をいれて、月本喜多治氏そのほかの手で、5月2日、神戸のオリエンタルホテルで Dubieux 氏にわたした。

宮崎で放送

第28回大會の熱のまださめないときを期して、宮崎放送局から、エスペラントに關する放送がおこなわれた。

講演者は杉田正臣氏、5月7日午後5時30分から6時までの30分にわたり、「エスペラントの輪廓」をはなし、巢山毅氏と杉田笑子嬢による會話の實例、中川尋子、巢山ハヅ、杉田笑子、杉田とみ、横山みえ、大坪眞幸、中川勝八の諸氏によるエスペラント唱歌の合唱がそえられた。

國際文化振興會の論文募集 エスペラント紹介の効果

オランダで放送

本誌3月號で、國際文化振興會の論文募集について書いたところ、Heroldo de Esperanto, Esperanto Internacia, そのほか、外國のエスペラント雜誌が紹介し、イタリア、ドイツ、イギリス、オランダ、スペイン、ユーゴスラヴィア、フランスそのほかから、おうくの照會があり、なかにも、スエーデンからの照會によれば、オランダからのエスペラント放送によつて知つたとあつたが、これは、エスペラントで定期的に放送しているコルトリーク局が放送し、これを聴取したものとおもわれる。

Franca Esperantisto 續刊

本誌4月號の本欄「ヨーロッパ戦争とエスペラント」のなかで、フランスでは、開戦後まもなく、しばらく、エスペラント文による印刷物の發行が禁じられたと傳えたが、おなじ個所で、これがエスペラントそのものに對する壓迫からでなからうと想像したとうり、たいへんおくれてではあるが、とにかく、4月のなかごろ、機關誌“Franca Esperantisto”の1月號がついた。つたえられた禁止については、すこしもふれてないが、いままでどうり、エスペラント文の記事がのつている。ひきつづき出されてゆくものとおもわれる。

ブラジル新聞宣傳局長に Fontes 博士

ブラジル政府は、昨年12月20日、宣傳文化宣揚局を改組して、新聞宣傳局としたが、その初代局長として、Lourival Fontes 博士を留任させた。博士は、エスペラントに十分の認識をもち、いままでにも、機會あるごとに、しばしば、エスペラントの國際宣傳用語としての價值を稱揚している。したがつて、ブラジルのエスペラント運動は、今後も、このひとの庇護のもとに、いままでの調子で、よき發達をとげるであらうと期待される。

各地報道

原稿は 20 字詰に！
締切は毎月末日厳守

東京

〔東京エスペラント倶楽部〕 TEK を世界第2の大都會のエスペラント會に相應しいものに仕上げたいと思い、委員會毎月一回第一土曜日に定期開催、その外に臨時の會合もやつて、更始一新の意氣込みで事業と事業のやり方を研究しております。

◇宮崎の全國大會には TEK から代表者として委員高橋菊藏氏に御出席をお願いし、saluto して頂く事になりました。当日は委員會からも祝電を送るはずで。

◇TEK 委員は、先日進藤氏から大會費用等のお話を承り、宮崎の同志各位の御盡力に對し應分の御應援を申し上げたいと云うことになりましたが、残念ながら現在の TEK の會計にはお金がないので、取りあえず委員の金を TEK 名義で 10 圓だけお送り致しておきました。甚だ少額で申譯ない事です。（井伏）

〔學會水曜例會〕 4 月 17 日の例會から、新しいテキスト「Tempo-Mašino」によつて研究を始めました。今度からやり方を少し變えて、上谷良吉氏、木村正太郎氏等を中心とし、出席者が輪講することになりました。豫習の時、理解しにくい所もありましたが、幸いに上谷氏が科學の方の専門家で蘊蓄を傾けて解説して下さいだったので、スラスラとよく解り、みんな大喜びでした。輪講には輪講の特徴があり、出席者は各自責任を感じて張り切っております。佐々城先生は始終を御覽になつて、非常な成功だとお賞め下さいました。どうか皆様も御出席下さいませ。テキストは 1 圓、學會にあります。

◇4 月 3 日の例會には、大阪の科學エスペラント會の桑原利秀氏が御出席、OES 文庫についてのお話がございました。又 10 日には朝鮮京城大學の教授長谷川理衛氏が御出席下さ

いました。近來毎週の様地方のエスペラントの方々がお訪ね下さるので例會は活氣づいてまいりました。市内の皆様もドシドシ御出席下さると、例會は盛んになり、エスペラントの研究熱は高まり、一面には例會が常設の歡迎會ともなるので大變結構だと思ひます。（井伏）

〔婦人聯盟東京グループ〕 4 月例會＝1 日川原夫人邸で、月例會と藤井、石、兩氏の送別會を兼ねて晚餐會を開催。出席者：萬、川原、井田、久保、後藤、藤井、石、柏原、井伏以上 9 名。委員長萬澤まき子氏から、婦人聯盟の今年度の仕事その他のお話があり、それについて種々協議致しました。また私達聯盟員が集つた時に、何にか景氣をつけるような聯盟の歌がほしい、と云う説が川原夫人から出て、皆様大賛成で可決され、その實現を委員に一任致しました。

晚餐には、川原先生や夫人の令妹も御参加下さり、夫人御自慢のコロッケを御馳走になりながら、婦聯の仕事として色々な計畫や希望を語りあつて、一夕を愉快に過しました。

最後に秋田雨雀先生の奥様が永らく御病氣のよしを承り、當日の出席者一同が少しづつ出しあつて、少額ながらお見舞をお贈り致しました。（井伏）

中部

〔名古屋エスペラント會〕 例會——毎週金曜日午後 7 時半より。於小坂先生邸。テキストはザメンホフ演説集（1 月終了、現在使用しているのは「沙翁悲劇篇」。例會出席者を本年 1 月より示せば、

1 月中	延人員	21 名
2 月中	"	23 名
3 月中	"	29 名
4 月中	"	19 名

◇初等試験 — 3 月 17 日午後 7 時より小坂先生邸にて施行。受験者 5 名。同夜宮崎の中川氏來訪。大會のことを色々と伺う。

◇白木委員長を宮崎大會に送る會——4 月 13 日夜白木氏宅に於て。今回自轉車にて宮崎大會に名古屋エスペラント會代表として出席される白木委員長を圍んでその行を壯にした。出席者 6 名。

◇5 月には遠足會を催すはずで。（淺野）

四 國

〔高知〕 4月21日夜7時より Verda domo 藤田 穂三先生方滞在中の大阪の川崎直一先生を中心に kantis aŭ interparolis en kaj pri Esp. 出席者は皆遠來の須崎町の松本鹿治, 赤岡町の橋田信之, 香宗村の横山正春, 高知市の辻重倫の veteranoj 外 6 komencantoj. 10.30 時散會。

なお川崎先生は藤田先生の gvido で 3 日間名所舊蹟を見物して, 24 日朝 8.30 時高知驛發宮崎の Kongreso へ向つた。

北 海 道

〔北海道エスぺラント聯盟〕 展覽會の材料もぼつぼつ集つたがまだ充分とは行かない。同志諸君の御寄附を切望する。エハガキ, 切手, 寫眞, 興味あるレテ-ロ, 人形なぞがほしい。日本大會もいよいよ近づいたが, 本聯盟からは昨年札幌で開催された北海道大會の決議として, 中等學校にエスぺラント導入の件を提案する事になつていたが, 困つたことに出席者がないので, その希望決議文だけを送ることになつた。

〔札幌エスぺラント會〕 高瀬先生内地方面御旅行のため 2-3 回會合を休んだが 20 日の水曜より, また元氣に皆集まつて居る。用書はフンドメント。熱心な會員の一人浪越春夫君が 4 月 10 日廣島の中川キヨ子嬢とめでたく華燭の典を挙げられた。21 日, 丸井食堂にて友人, 同志のために盛大な披露の宴をはられた。出席者はエスぺラント關係では HEL 相澤, 札エス木村, 佐藤, 札鐵三崎(缺席) 其の他は藥劑師代表, 弘道聯盟, 精神分析會, 短歌會, 雄辯會, ラヂオ體操, 皇漢學會, 普門品會 ktp. の會長幹事等であだかも札幌市の文化團體の交歡會の如くであつた。

〔小樽エスぺラント會〕 4 月 18 日(木) 保證牛乳階上に於て北海道大會準備委員會を開く。相澤氏の小樽新聞記事を機に, 講習會如何の問題を議し, 大體 5 月 10 日前後に之を行うことに決定。

爾後, 例會を毎月 12 日, 27 日の 2 回に, これを開くこととした。インフォルミ-ロを高橋氏持參, 早速發送のこと手配す。出席者: 藤川, 脇坂, 高橋, 福田, 村田, fino 竹内



寫眞は 4 月 22 日朝高知公園にて。向つて左より藤田 穂三, 川崎直一, 辻重倫の諸氏。

◇4 月 27 日(土) 保證牛乳階上に例會を開く。講習會開催に関する雜件を協議す。出席者: 藤川, 高橋, 福田, 村田 (村田)

朝 鮮

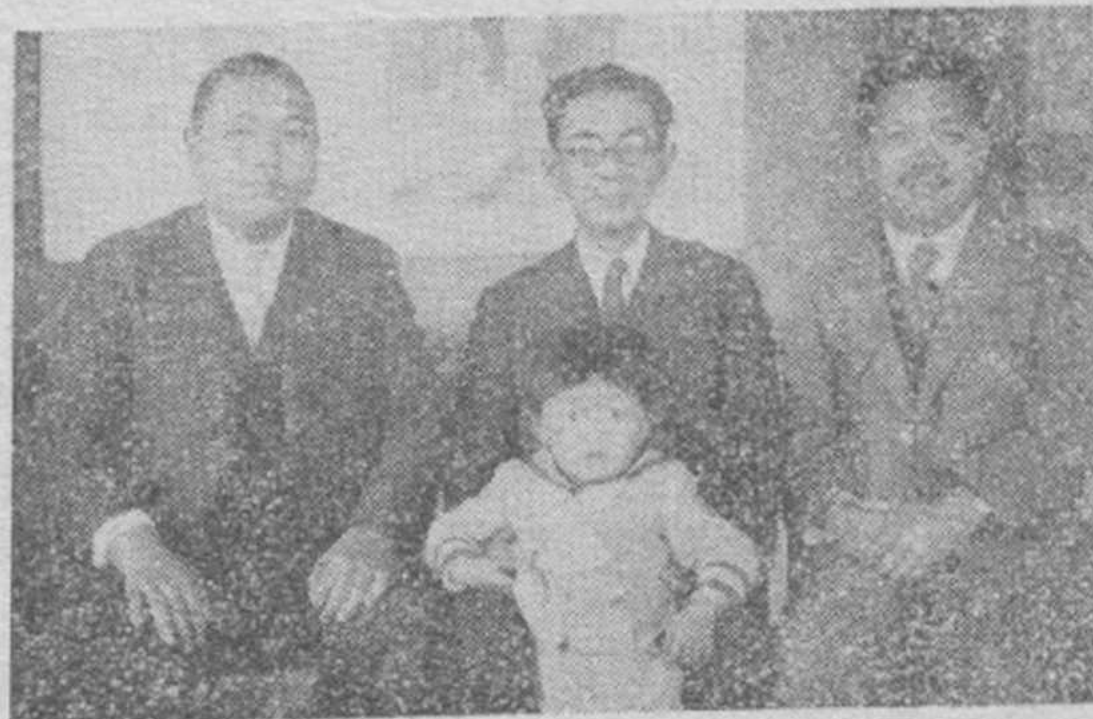
〔京城〕 4 月 28 日小坂さんが京城へ來られました。突然のことで, 長谷川君と僕と 2 人でおあいしました。その節とつた寫眞がこれです。(岡本好次)

大 陸

滿 洲 國

〔奉天〕 奉天エス界の重鎮尾花芳雄君は今回チ、ハル鐵道局に新設せられたチ、ハル工事事務所の所長として榮轉せられたが, 其の送別會を 4 月 2 日 19 時より奉天市内支那料

寫眞は 4 月 28 日京城にて。向つて左から岡本氏, 小坂氏, 長谷川氏令息理元さん, 長谷川理衛教授



理店瀋陽大飯店に開催した。参會者は主客の外安部、峰下、北尾、高木、坂梨、田中の 8 氏で歡談に時の經つのも忘れた位であつた。

席上近く開催豫定の全滿エスペランティスト會合に關する下打合が出来たことと最近來奉せられた坂梨幸光氏(元大牟田に於ける闘士)を迎えたことは此の會を一層有意義ならしめた。(田中報)

中 國

〔上海エスペラント會〕 今次事變前相當活氣のあつた上海エスペラント會は支那側エスペランティストが重慶方面に蔣介石と共に逃避したので現在では支那側のエスペランティストの消息は不明の様である。香港では講習會を開いたり華字紙に宣傳したり相當活潑に働いている。

所謂孤島上海は支那の文化の中心地を爲してはいるがエス語の出版物はあまり見當らない。最近是新文字運動が盛んである。我國のローマ字運動といつたもので展覽會を開いたり案内書も出ている。支那語の發音通りにローマ字綴りの支那式のことを考案して使用しているが四百餘州かなり差異があるので廣州

語、江南語、北京語といつたふうに教本も別れている。

あまり前置きが長くなつたが4月の初めに大阪の同志池川清氏から日本エスペラント觀光協會の支部委員を上海に置き度いからの依頼の手紙を受けたので學會名簿によつて在滬日本エスペランティストに4月2日午後6時半北四川路明治製菓樓上に集合してもらつた集つた同志は北村茂美、鈴木當之、富松正雄、佐々木孝一郎、桑田茂、阿部英二郎の諸氏で、特に富松氏は綠星旗を用意して來られ樓上から北四川路に向けて懸えされたのは大いに効果的であつた。

相談の結果委員には阿部英二郎氏をお願いすることとなり不在等の場合は桑田茂氏が代理することとなつた。

因に阿部氏のアドレエソは上海虹口文路530 號三通書局内電話 51387 番である。

夕食を共にし乍ら老上海の北村、佐々木、鈴木の諸氏から上海のエス運動に就いて話され中途階下の看板を見て立寄られた旅行中の京都の同志安達孝三郎氏を加えて記念撮影をし午後 10 時毎月 1 回定例的にクンシイドを約して和氣霽々裡に散會した。(桑田報)

平野曠君を大陸に送る

同志平野君が3月中旬大陸に渡つた。同君は街の言語學者で、大阪外語ロシア語科を卒業、在學中より熱心なエスペランティストとして活躍され、卒業と同時に大阪府外事課の通譯となり、専らロシア語學を専攻していられた。私は同君の研究心には一再ならず敬服しその學識のいよいよ深くなるとするとき、ハルビンに轉住されることになつたのを大變惜しい氣がする。

大阪のエスペラント運動が比較的順調に進捗して來たのは勿論多くの人々の愛にもよるものであるが同志平野君の御盡力による點が多い。私は同君を見送りつゝ 1 人の街の言語學者・エスペラントの理解者が大阪から去つたことをこの上なく心残りに感じた。

私は平野君がハルビンに渡つてから相變らず、熱心にエスペラントを研究され、その持つ善さを充分に大陸の各機關に認識せしめられんことを切望する。聞くところによれば、大陸ではエスペラントが、日本人向きに組織

されているよしであるが、新東亞の建設に際しては官民一致して日滿支三民族の協和發展親善増進、意志の徹底的疎通のための言葉の開放を實踐せねばならない。そのためにも平野君に負う所は大きい。ハルビンのエスペラント會員は是非一度平野君の歡迎會を催してもらいたい。私は大阪で送別會を開く機會を失つて申譯なく思つている。(池川清)

大會ポスターに就いて

第 28 回大會のポスターは各方面から絶大な御好評を戴いて委員一同悦んでおりますが其後本誌の記事を見て御申込下さつた多くの方に對して手不足のため未だ發送いたしておりません。申譯ない次第です。そして尙甚だ申兼ねますが大會の會計整理上實費御負擔をお願いもうしたいのであります。各位の御諒承をお願いもうしあげます。(實費は荷造送料とも 45 錢。なるべく振替で鹿兒島 8802 番へ御拂込をお願いします。)

大會準備委員會

SUR LA JURNALISMO

聞雑誌とエスペラント

新

聞

小樽新聞 4. 9-11-12. 「學藝欄」に「先人を偲ぶ・ザメンホフ博士の死、國際語の創始者——相澤治雄」——1. 人類の國際語出現への希望, 2. ザメンホフの國際語觀と理想, 3. エスペラントの誕生, 4. ザメンホフの死。
(水島彩氏報)

大阪毎日 (宮崎版) 4. 11. 「エスペラントを通じ八紘一宇大精神を海外に宣揚, 廿八日から三日間宮崎で大會開く」——準備委員長杉田正臣氏の談話入りで大會の豫告。

大阪朝日 (宮崎版) 4. 14. 「一堂に『世界生徒兒童の繪』廿日から宮崎大朝社で展覽會エスペラント全國大會の前奏曲」——大會にさきだつて, 宮崎市で開かれた, 大牟田植田半次氏蒐集世界生徒兒童繪畫展覽會の豫告。「かくのごとく世界各國の生徒兒童の作品を蒐集し得たことは國際語エスペラントを通じてはじめてなし得るところで, わが國でも前例がなく各方面の興味を呼んでゐる」とある。

海運貿易新聞 4. 18. 「『世界兒童の繪』廿日から宮崎市で開く」——うえと同一内容
(横山隆氏報)

大阪毎日 (宮崎版) 4. 27. 「エスペラントを通じ全世界に日本精神を宣揚, あすから三日間宮崎で大會開く」——大會の詳細なプログラムを報道。

福岡日日 4. 23. 「エス語大會, 會員一千名

が參集して」——大會の豫告。

大阪朝日 (宮崎版) 5. 1. 「東亞の新秩序世界に宣揚, 全國の來會者三百名, 日本エスペラント大會終る」——大會の模様について, くわしく報道したのち, 別に「メセージ, 來朝中の伯國文化視察團から」の表題のもとに, ブラジル・エスペラント聯盟からのメセージの譯文をのせている。

雜

誌

新女苑 4月號「フィンランドで逢つた婦人達——市河かね子」——20年前フィンランド初代公使として日本に滞在して日本のエスペラント運動にも少からぬ功績をのこして去つたラムステット博士の夫人と交際したこと, フィンランドのエスペラント協會を訪れて歓迎をうけ毎回出席したこと, およびフィンランドの婦人エスペランティストの生活や活動について言及している。
(島津かね子氏報)

女醫界 4月號「獨參居語録——教授右開居士」に「一藝能に秀でたるものは屢々他の言を容れず」の例として, 「一二の外國語に練達な人はエスペラントの話をして『暇がない』であつさり片附けてしまつて我々の言を聞かうとしない」とある。

おねがい:——この欄の資料をおおくりください。編集部ですでに気づいているだろう, たれか, ほかのひとがもうおくつたであろうとかんがえるところから, 往々にして, 重大なものが洩れることがありますから, 資料を發見されたかたは, ぜひお知らせください。

• Parolas Membroj •

「圖解辭典」Esp. 譯參加者

その後の申込者したのとうり。(4, 5月號参照)。

發電所 202-203

電氣機械 204

電燈 205

ラジオ 302-303

國家・法律 420-427=池川清

=橋田慶藏

書物・新聞 87=藤間常太郎

度量衡 88

飛行機, 飛行船, } =田中達雄

飛行家 395-400

上水道 348 } =ヒラ マサズミ

下水道 349 }

Esp. 譯完了のもの

公共 (大部分)=池川 清

天地・時空, 人=川崎直一

この號は、その編輯の最中に、わたくしが大會へ出張しなければならなかつたために、内容がいつもとことなつたものとなりました。

“Krestomatio kreskanta”, 「時事文研究」, 「たどしい文章のかきかた」などをやすみ、5-6年まえから、編輯籠のそこにほうりこんだままにしておいた、ふるい翻譯「陶淵明」のうち、第1場 10 ページを1回にのせました。

「ミツキエヴィチ」にいた肖像は、ポーランド大使館の好意によるものであります。

來年の大會は、東京でひらかれることになりました。東京では、4年ぶりの大會であります。おうくのかたが、全國からおあつまりになることを、いまから期待しております。

ことしの大會においても、また會費値あげのことが問題にとりあげられました。低物價政策にかんがみても、この際、値あげすることは、おだやかでないとおもいますので、當分値あげする意志のないむねをこたえてはおきましたが

會員のかずのすくないおりからでもあり、學會の財政狀態も、十分とはいわれませんが、できるだけおうくのかたが、むりのない範圍において、特別會員なり、賛助會員になつて、その不足をおつぐないください。もちろん、事務のほうでも、できるだけ、費用をつづめるようにしております

新賛助會員

(4月1日から30日まで)

胡宇翔氏(黒河), 住吉知恵子夫人(新京), 藤田武男氏(東京), 近藤本禪氏(東京), 宮澤生也氏(神戸), 島崎捨三氏(宮城), 松原八郎氏(岸和田), 浅井昇氏(新京)のかたがたは、あたらしく、賛助會員になつてくださいました。感謝にたえません。

財団法人日本エスペラント學會 會費

正會員 (年額) 3圓
賛助會員 („) 5圓
特別會員 („) 10圓
終身會員 一時金 100圓以上

SENLINGVULO 賣切

5月號のこの欄に廣告した Senlingvulo は、なにぶんにも、部數がすくなかつたため、たちまち賣りきれました。

個・人・消・息

笹山晋夫氏——東京帝大醫學部卒業、同附屬醫院都築外科に入局。

中村幸雄氏——東京帝大物理學科卒業、逓信省電氣試験所に入所。

川崎直一氏——長男がうまれホモとなづけられた。

小坂狷二氏——4月のすえ、奉天へ出張された。

4月中上京、學會訪問者：——上島武氏(名古屋), 伊藤巳酉三氏(岡山), 長谷川理衛氏(京城), 小坂狷二氏(名古屋), 橋田慶藏氏(廣島), 宮澤生也氏(神戸), 野島史郎氏(京都), 伊藤幸一氏(大阪), 中原脩司氏(京都)。

La Praktiko 豫約

興味ふかい月刊雑誌“La Praktiko”は、爲替の關係で、しばらく、豫約取扱を中止しておりましたが、こんど、特別に少部數はいることになりました。以前の豫約者に優先的に取次ぎしましたが、のこりがすこしあります。御希望のかたはおもうしこみください。1年分5圓のところ、特價4圓50錢にします。すでに、1, 2, 3號は到着しておりますから、すぐにも配本いたします。

小坂賞寄附

金30圓(副賞費として)

名古屋匿名氏

毎月一回
一日發行

エスペラント

第八年
第六號

昭和十五年五月十日 印刷
昭和十五年六月一日 發行

編輯兼
發行
印刷人

大井 學
竹田 佐藏
東京市神田區三橋町二ノ四

定價一部20錢・送料5厘

〔會員以外の年極購讀は〕
とりあつかいません。

印刷所

一匡印刷所
東京市神田區三橋町二ノ四

發行所 財団法人日本エスペラント學會 振替東京 11325
所 東京市本郷區元町1丁目13番地4 電話小石川5415

エスペラント 捷徑

小坂狷二著

四六判紙装 150 ページ・定價 50 錢・送料 6 錢

外國語の素養ある者のため

最も信頼すべき獨習書として、古典的聲價をもち、エスペラントの獨習書といえ、ただちに「捷徑」といわれるほどになつてゐる。1 冊を前後 2 篇にわけ、前篇では、多くの文例を交へ、系統的に文法を教へ、後篇では、童話・會話・詩・諺・小説・演説など、いろいろな種類の文章を與へこれに、模範的な譯文と、適切な註釋とを加へ、さらに、「作詩法」を添へエスペラント詩を作り、あるいは、これを鑑賞するための手引としてある。本書 1 冊を十分に讀みこなせば、1 人まへのエスペランティストとして恥かしくないだけの實力を備へることができる。

小學校を卒業したただけの人のための獨習書

エスペラント講座

菊判・104 ページ

定價 50 錢・送料 6 錢

全 1 巻を 3 篇にわけ、上篇は外國語の知識の全然ないものにもよくわかるよう、全くの ABC から始めて、初等文法一般を説き、中篇は、上級文法、後篇は、深切な譯註つきの讀物を多數入れてある。これについて學べば、小學校卒業だけのものでも、最短期間に最大の實力を得ることができると請合ひである。(目下品切)

宣傳と學習をかねた小冊子

エスペラント案内

四六判 48 ページ美本・定價 30 錢・送料 3 錢

城戸城益敏著 「知識」 15 ページ、「文法」 15 ページ、「讀み物」 7 課。

最上質の用紙に、全文 6 ポイントと 7 ポイントとの活字で、ぎつちりと、しかし鮮明無比に印刷してあるから、みかけは瀟灑なパンフレットであるが、内容は、普通の書物の百數十ページにあたり、大活字本以上に讀みやすい。寫眞版凸版 40 個入り。これ 1 冊でエスペラントとは何か、といふことから、文法全般にいたるまで知ることができる。まさにエスペラント獨修書中の豆戦艦である。

財團法人 日本エスペラント學會

東京市本郷區元町 1-13・振替東京 11325

OES 文庫既刊

1 城戸崎益敏：

VERDA KANTARO

60 錢・送料 3 錢

最もひろく愛唱される歌曲、獨唱用 38 曲、合唱用 7 曲、樂譜および全歌詞つき

2 川崎直一：誤り易い單語集

40 錢・送料 3 錢

エスペラントと他の國語と比較研究し學習者の誤り易い單語に注意を與う

3 桑原利秀：

エスペラント家族合せ

40 錢・送料 3 錢

エスペランティストの會合に、これひとつあれば、時間が愉快にすごされる

一部賣取次

財團法人 日本エスペラント學會

振替東京 11325 番

OES 文庫入會希望者は大阪市西區靱南通 3 丁目日清ビル早稲田クラブ内大阪エスペラント會文庫部(1 部賣取扱わず)へ内容見本請求あれ。

エクゼルツァーロ詳解

小坂 狷二 著

附

發音解説

接頭、接尾字一覽

エスペラント全文法

近刊

小坂狷二先生生誕五十年記念刊行

小坂著作集・1

B 列 6 番(四・六) 230 ページ

定價 1 圓 50 錢・送料 9 錢

わが國エスペラント運動の父、小坂狷二先生が生誕 50 年を迎えられるにあたり、學會は先生の不朽の功績を記念するため、その著作集の刊行を企てたが、ここに近く、その第 1 篇を出す。「エクゼルツァーロ詳解」は、雑誌「エスペラント」1934-5 にわたり連載されたものであるが、この版においては、雑誌掲載のものに多くの朱筆を加え、雑誌では省いた“La Feiro”をも加えていただいた。

全エスペランチストが再讀三讀誦すべき「エクゼルツァーロ」の原文に譯文、文法、註を加えたほか、發音解説、接頭、接尾字一覽、16 條全文法が加えてありさらに索引が添えてある。初學者も高級研究者も必ず備えるべき貴重な文献である。

本書は“Fundamento de Esperanto”(目下品切)のうち“Universala vortaro”がかけているだけである。

財團法人日本エスペラント學會
東京本郷元町 1・振替東京 11325 番

昭和七年一月十二日
昭和十五年五月十日
昭和十五年六月一日發行
(毎月一回一日發行)
第三種郵便物認可
印刷納本

「エスペラント」第八年 第六號

定價 二十錢 (送料五厘)